

嚶鳴館遺草巻第五

「つらつらぶみ」 君の巻

つらつら世の中を被成御覧候所、大概高位
 貴人には知慮通明徳行優美なる君は稀々にて無
 位素賤の士には知識人に勝れ、徳行世に被尊
 候人も不断出候事、御会得難被成候間、
 愚老所見御聞被成度との御事、篤と承知仕
 候。

先以高貴の御身分にて、ケ様の所に被付御心
 候御事、必竟常々御好學御読書の御力と
 感心仕候。

嚶鳴館遺草巻第五

「よくよく考えた御返事」 君主へあてたもの

よくよく世の中をみてみると、だいたい地位の高い人
 には、物事について深く考える能力があつて、道義にか
 なつたことを行ない、上品で美しい人物がほんとうにま
 れであつて、何の位もなくして身分の低い者に、知識がす
 ぐれて道義になつたことを行ない、人からも尊敬され
 る人物がいつもいる。どうしてそんなのか。それがよく
 わからないので、わたくしの考えをお聞きになりたいと
 のこと、よくわかりました。
 まずもつて、高い御身分にありながら、こうしたこと
 をお気づきになられましたことは、いつも學問を好み、
 読書をなされているお力からだ、感心いたしました。

ぐろうせんがくのしよけん けんりよ あいかないうすすべきや おぼつかなく
愚老浅学之所見、賢慮に相叶可申哉、無覚束
ぞんじたてまつりそうらえども きもん したが ふくぞうなくもうしあげそうろう
奉 存 候得共、貴問に随ひ無腹蔵申上 候。
ふけいの もんごんなど ごようしゃくださるべくそうろう
不敬之文言等は御用捨可被下 候。

ま ひと もうすもの かみ てんしおうこう そんき
先づ人と申物は、上は天子王侯の尊貴なるよ
しも さんやさいみん ひせん いたる このよ うま
り、下は山野細民の卑賤に至まで、此世に生れ
そうらえ そのまおしえ もうす ひと なりたちそうろうこと
候得ば、其儘教と申ものにて人と成立 候事
ごぎそうろう
に御座 候。

あかご こんこんとん
赤子のうちは混々沌々、ほぎやほぎやより外は
これなきもの そうろう ふほ そうろう
無之物に 候を、父母がいだきかかへ 候て、ひ
ちち
だるいかとて乳をふくめ、寒いかとて着せ、あつ
さむ
いかとてぬがせ、ねむいかとてすかし、

わたくしのような者の考えが、あなたさまのお考えに
かなうものかどうか心もとないことでございますが、ご
質問について本心を申し上げます。失礼なこともあるう
かと思いますが、どうかお許しくださいますよう。

まず、人というものは、上は天子、王侯といった尊い
お方から、下は山野にくらす貧しい者にいたるまで、こ
の世に生まれたなら、そのまま教えによって人になるの
でございませす。

あか ぼう
赤ん坊のときは、すべてがいりまじって何もわかりま
せんので、ほぎやあほぎやあと泣くことしかできません。
その子を両親がだきかかえて、お腹がすいていないかと
乳を飲ませ、寒くないだろうかと服を着せ、暑いのでは
ないかと脱がせ、ねむいのではないかとあやし、

七夜のうちよりししをやり候得ば能申事を聞、
取り いたさず 無理無体にしいしいと教へ、
取はづしを不致とて、
さてめ み みみ きこ した まわ てあし はたら そうろう
扱目も見え耳も聞え、舌も廻り手足も働き候
ほど あいなりそうらえ ふ ほきようだい はじ よりそ そうろう
程に相成候得ば、父母兄弟を初め、寄添ひ候
ほど ひと もうしなら つきひ
程の人が、ぢぢばばととかかと申習はせ、月日を
さし さし
指てはののさまとをがませ、花をうついあかいと
をしへ、鳥はとと犬はわんわと申聞せ、にぎに
とり いぬ もうしきか
ぎとて手を握らせ、あいよあいよとて歩び習はせ、
すんじ ま おし もうさず あよ なら
寸時の間も教へ不申といふことなく、是によりて
せいちよう
成長いたし、

生まれてまもないときからおむつをかえてやるから、よ
く言うことをきき、いまだおむつがはずれない時期であ
っても、おむつやおしっこおしっこ教える。そうして
目が見え、耳が聞こえるようになり、ものが言えるよう
になり、手足も動かせるようになると、おとうさん、お
かあさん、おにいさん、おねえさんをはじめ、寄り添う
人が、じじ、ばば、とと、かかと教え、お月様やお日様
をさして、ののさまとおがませ、花を美しい、赤いと教
え、鳥はとと、犬はわんわと言い聞かせて、にぎにぎと
言って手を握らせ、あんよあんよと言って歩き習わせ、
少しのあいだも教えないということはなく、こうして成
長して、

十五六とも申せば最早人中に立交り、身分夫々の付合をも致し、熱い寒い否な忘の辞義挨拶も人なみなみのおとなと申ものに相成候。

此段は貴人とても賤民とても、事は替り候得共、教なくて成立候と申人は無之候。

然處に身賤く生れ候得ば、何弁へもなき

幼年の時より、聊もあしきこと有之候得ば父母兄弟杯が目をいからし、齒をかみおどし戒めて、

かくするものぞ、さはせぬものぞとて、しかりののしり候故に、幼児の時よりものに遠慮気遣ひ

と申事を自然と覚え、

十五六歳ともなれば、もう人に交わって、身分それぞれのつきあいをし、おさむいですね、おあついですね、といったあいさつも人なみにするおとなという者になるのでございます。

こうしたことは、身分の高い者、身分の低い者と、立場はかわっていても、教えられずに人となる者はいないのでございます。

そうではありますが、身分の低い家に生まれてきた子は、何とも思わずにおさなるときから、少しでも悪いことをすれば、父母や兄弟がにらみつけ、口をいからせてしかりつけ、「こうするのだ」、「こうしてはいかん」としかるから、おさないときから遠慮や気づかいということ

苦しきを忍び、大儀なる業もいたし習ひ、人の氣
をかね目顔を悟り、成長いたし候得ば利発なる
も愚鈍なるも、人間相応の勤は致し候事に御
座候。

其中に福德厚く受得て生れ候人は物心覚
へ候より、いつとなく手習学問杯に志ざし
候て、素読を致し講釈など承り、少々宛
合点参るに随ひ、日々月々に面白く相成、夫よ
りしては人も頼まぬ辛苦心労をも自身と好み
候て、なつかしき父母兄弟の手を離れ、他所他
国へも罷越、他人の交りをも広く致し、

苦しいことをがまんし、大仕事も習い、人に対して氣を
つかい、顔つきから察することができるようになり、成
長すれば、かしこい子もそうでない子も人なみのつとめ
ができるようになるのでございます。

そうしたなかで、財産や幸せに恵まれて生まれてきた
者は、ものごころがつきはじめたときから、いつという
ことなく手習いや学問などをこころざすようになり、素
読をして講義などを受けるようになり、すこしずつ理解
できるようになるにしたがって、日々に月々におもしろ
くなる。そうになると、人から頼まれもしないつらく苦し
い思いや、あれこれと心配して心を使うことでも、みず
からつとめるようになって、そだててくれた父や母や兄
弟の手からはなれて、ほかのところや他国へまでも出か
けるようになって、人の交際も広がって、

堪忍かんにん用捨ようしやをも致いたし習ならひて、飢渴きかつの難儀なんぎをも身みに受うけ、人情にんじやうの厚薄こうはく人事じんじの苦楽くらくをも弁わきまへしり、賢智けんちある人ひとを見れば敬うやまひ尊とうとび、教導きやうどう指南しなんを願ねがひ受うけて、古今ここんの世よの姿すがた、安危あんき存亡そんぼうの道理どうりまで会得えとくつかまつ、仕みり、身みに微官びかん寸禄すんろくも無これなく之そうらえも、自然しぜんと人ひとにも信用しんじやうせられ候そうろうて、終ついに名譽めいよの人ひとと相成あいなり、素そ賤せんのままにて高位こうい貴人きじんの前まえにも伺候しこうし、治国安民ちこくあんみんの談だんにも預あずかり候そうろう程ほどに相成あいなり候そうろう事ことに御座ござ候そうろう。

がまんすること、判断することも習い、飢えとかわきの苦しさをも知って、人情のあついこと、うすいことや、人のすることの苦しいことや楽しいことをもわきまえ知って、賢くて知恵のある人をみれば尊敬して、指導を頼んで、むかしからいまにいたる世の中のこと、安全であること危険であること、存続するか消滅するかということの、ものごとの意味を十分に理解して、自分自身には何の位くらいも、仕官してもらほうろくう俸禄ほうろく（給与）もなくとも、自然と人に信用されて、ついには名譽ある人物となって、身分がなくても身分の高い人のまえて、国を治め民を心配させない政治の話にも相談を受けるようになるのでございませう。

すべ いやし きぎよう けいこしゆぎよう いたさずそうろう
惣て賤き作業にても稽古修行を不致候

うま じようずこうしや あいなりそうろうこと

て、生れのままにて上手功者に相成候事は、

ここんこれなきぎ あいみ もうしそうろう いにしえ せいおうけんくん

古今無之儀と相見へ申候。古の聖王賢君と

もう ども たいきよう もうしそうろう かいにん うち おしえ

申せ共、胎教と申候て、懐妊の内より教を

もう うま いでたま ひ けんしようほき だいじん ちゆうしん

設け、生れ出玉ふ日より賢相輔佐の大臣、忠信

とくけい じしん さゆうぜんご たちなら ききよどうせいおし

篤敬の侍臣、左右前後に立並びて、起居動静教へ

いまし いまし しもじも ふほきようだい ごと

戒め諫めただして、下々の父母兄弟の如く、

しかりののしり打はたきをせぬまでにて、寸分の

ゆだん おし そだ まい そうろう つき なんじ ごと せい

油断なく教へ育て参らせ候に付、爾の如く聖

おうけんくん たま こと ごごそうろう おそれおおくそうら

王賢君にはなり給ひし事に御座候。恐多候

えども どうしようぐう ごようねん せんしんばんく つみなされ

得共、東照宮の御幼年より、千辛万苦を被為積

そうろう てんか ぬし なりたま ぎ だれ かれ つた

候て、天下の主と成給ひし儀は、誰も彼も伝へ

うけたまわ そうろうこと ごごそうろう

承り候事に御座候。

どんな簡単なことでも、練習や修行をせずに、生まれ

つきのままで、じようずでたくみな人になることは、む

かしからいまにいたるまでであったことがございません。

おかしの徳のすぐれた君主や賢い君主であっても、胎教

といつて、妊娠したときから教育され、生まれた日から

は賢明な重役や、まごころをもち、うそいつわりがなく、

人情に厚くてつつしみ深い家臣がまわりをとりかこんで

日常の生活を教え正して、しもじもの父母兄弟のように、

しかつたたくようにしてまで、すこしも油断すること

なく教へ育てたから、あなた様のように徳がすぐれた賢

い君主になられたのです。恐れ多いことですが、

東照宮〔徳川家康公〕がおさなきときより、つらいこと

や苦しいことをいろいろ経験されて、天下の主となられ

たことは、だれでも知っていることとございます。

然故しかるゆえにかくまで目出度御代めでたきみよとなり、御子孫御ごしそんご
長久ちようきゆうに被為榮候さかえなされそうろうおんこと御事に御座候ごぎそうろうらんせ。乱世の時とき
を推し考へ候おかんが所、只今国主城主ただいまこくしゆじようしゆの面々めんめん、其その
先祖先祖せんぞせんぞを承りうけたまわ伝へ候得ばつた、扱も扱もそうらえ辛苦艱さて
難なんなる儀共言語ぎどもごんごに絶し候事ぜつに御座候そうろうこと。
然所しかるところ、東照宮の御幼年とうしやうぐうより御辛勞ごしんろうを被為尽つくしなされ
候御かげを以てもつ、四海太平しかいたいへいに一統仕りいつとうつかまつ、弓はゆみ
袋ふくろに包みつつ、太刀刀たちかたなは鞘さやに納りおさま、けふよあすよ
と年積り世移りとしつも、最早式百年もはやにひやくねんの安楽世界あんらくせかいに生れうま
候人そうろうひとは上下共かみしもともに何の恐れなん気遺おそひもなく、次第きづか
次第しだいに驕奢安逸きやうしやあんいつの風俗ふうぞくに相成あいなり、諸侯貴人しよこうきじんは腹はら
内うちよりの諸侯貴人しよこうきじんにて、

ですからこのようなめでたい世の中となって、御子孫も
末永く栄えておられるのです。戦国の時代のことを考え
てみますに、現在の国主、城主のかたがたは、その先祖、
先祖を受け継いでおられるのであって、ほんとにまあ、
先祖が苦しみ悩まれたことは、ことばに言いつくせない
ほどのことでございます。
ところが東照宮がおさないうちから苦勞されたおかげ
で、世の中が平和になって、弓は袋にしまい、太刀、刀
は鞘さやにおさめ、今日、明日と年がたつて世の中が移り変
わつて、すでに二百年もの平和な時代に生まれた人びと
は、上下ともに何も恐れることなく、しだいしだいにぜ
いたくをして安気あんきにくらすようになって、諸侯や身分の
高い人は、こころのそこから諸侯であり身分の高い者と
なつて、

うま いでたま ひ ぜんご きゆう たちよりそうろうほど
生れ出玉ひたる日より前後左右に立寄 候 程の
ひと ただひとすじ きげん うかが ついしよう もつばら いた
人は、唯一筋に機嫌を伺ひ、追従を専に致し、
いささかはつめい こと これありそうらえ たい ほめ
聊 発明らしき事も有之候得ば大さうに誉そ
よほどあしきことこれありそうろう
やし、余程悪敷事有之候 てもそれはおしだまり
そうろう ふじんよし みやづか どうよう つら やわら こえ
候 て、婦人女子の宮仕へ同様に面を和げ声を
かどたて だいいち ほうこう こころえそうらえ
ひそめて、角立ぬを第一の奉公と心得候得ば、
じんくん さぎよう かんむりしようぞく うつくしくめされ
人君の作業は冠 装束を美敷被召、ものごし
たちまわ おもおもしろく しも ひとこと ぜんあく もうしあげがたき
立廻り重々敷、下よりは一言の善悪も難申上
よう さま これ いふう きみ しよう
様にふるまひ給へば、是を威風ある君と称し、
おほへい手高にて大儀苦勞の言葉をも、むさとか
たま とうと ぞん
け玉はぬを尊きことに存じ、

生まれたときからおそば近くにつかえるほどの人が、た
だただごきげんをうかがい、こびへつらい、ほんの少し
でもかしこそうなことがあれば、おおげさにほめたたえ、
とても悪いことをしても、そのことにはだまってしまい、
女がつかえるように、にこやかな顔をして声をあらげず
に、かどがたたないようにすることがもつとも大事なこ
とだと心得るようになれば、君主の仕事とは、衣服を美
しくして、ものごしを重々しくして、下の者がひとこと
も、ことの良し悪しを言うことができないうにふるま
えば、これが威厳があつてりっぱな君主であるとほめた
たえ、いばって無礼な態度で感謝のことはをかけないこ
とが高貴なことで、

かりにも恭遜謙讓の姿は、おめおめ敷様に恥
たまへば、下人臣の行儀もまた衣紋立派に立廻り、
閉口低頭して、是非善悪の沙汰は一言も不申上
を、君を敬ひ尊ぶと心得候事故に、凡今の
人君は生れ出玉へる日より、人の実心実情の取
扱ひを受玉ふこと露いささかもなく、虚偽浮薄
の介抱にのみ育ち給へば、人情世態安危存亡の
道理を悟り玉ふべき便りなく、成長に随ひ
驕傲の心のみ募り候て、

かりにもへりくだって譲るというすがたが、おめおめ（恥
を感じないで平然）としている態度だと、はずかしく思
うようであれば、家臣の行ないもまた衣服だけりっぱに
して、だまって答えずただ頭を低くして、正しいことと
正しくないこと、善いことと悪いことについてはひとこ
ともいわないことが、君主を敬うことだと心得ますから、
たいがい今の君主は生まれたときからほんとうの（こころ、
ほんとうのことについて教えられることがほんの少しも
なく、うそいつわりと、あさはかで軽々しいことだけで
育ちますから、人のなきけ、世の中のようす、安全であ
るか危険であるかということ、引き続きのか減びてしま
うのか、というものごとの正しい筋道を理解する方法が
なく、成長するにしたがって、おごりたかぶる気持ちだ
けがますますはげしくなって、

貴人きじんと申者もうすものはよきもあしきも、人ひとはすべて敬うやまひ
尊とうとみ、大切たいせつに存ぞんするものとのみ思おもひ玉たまふことに
成行なりゆき候そうろうこと、是非ぜひもなきならはしに御座ござ候そうろう。
乱世らんせの時は貴とききも賤いやしきも人も我われも一統いつとうに不安ふあん
心しんの身みの上うえにて、足輕あしがる鎧持やりもちの機嫌きげんをさへ大切たいせつに
心得こころえ、たべる物を分ものて与わけへ、着ある物を脱ぬぎきせて、
人ひとの心こころを取とり不申もうすず候得ば、まさかの場所ばしょにて身みの
代かわりにならぬと申道もうすどうり理りを存ぞんじ、其中そのなかにも名將めいしよう
賢主けんしゅと聞きこえ候程そうろうほどの人ひとは、取分とりぶん此勘弁万人このかんべんばんにんにも
勝すぐれ、我一己切われいつこぎりの知恵才覚ちえさいかくにては、何事なにごともならぬ
ものもうすところと申所もうすところを深く会得えとくして、家来眷属けらいけんぞくと申せば
手足てあしの如ごとく大切たいせつに存ぞんじ、其手足そのてあしの助たすけを以もつて国郡こくぐん
の主ぬしとなられ候時そうろうときは、

身分の高い人というのは、よい人も悪い人もみな敬い大
切にするものだと思ひこんでしまうことは、どうしよう
もない習慣でございます。乱世のときは、身分の高い人
も身分の低い人もみな不安な身の上ですから、足輕や槍
持もちが気に入るように大事にして、食べるものもわけあ
たえて、着るものにも気を使つて、その人のこころ
をとらえておかないと、まさかのときに身代りにならな
い、といった道理を知つており、そうしたなかで、すぐ
れた武將、賢明な君主といわれるほどの人は、とりわけ
てこの考えがすぐれており、自分ひとりだけの考えや能
力ではどうしようもないことをよく知つており、家来や
一族の者といえは、手足のように大切に思ひ、その手足
の助けによつて、国、郡の主となられたときには、

忠義有功の臣には高知貴職をも授け与へ、身に
かへて重宝被致候に付、其人々も主人は一身
の首よりも大切に致し、手足の力を限り、君の
為国の為には身を塵芥とも不存、君に聊も過
失ありて、世の謗りをも受玉ふべき時は、命を捨
て諫言教訓を尽し、君を明君に仕済し、我は
忠臣になり済して、君臣ともに今の世までの手
本とは成候事にて御座候。
只今の世は君に君の稽古修行とても無之、高
位高官には生れ出玉ひながら、明君賢主と後代
称せられ給べき福德はたへて生れ付玉はぬ
衆中も、あまた有之候様に被存候。まづ
諸芸術を御覧可被成候。

まごころをつくしてつかえて功績のあつた者には、多くの俸禄（給与）と高い身分をあたえて、自分自身よりも大切にするから、その人びとも主人を自分の首より大事にして手足の力のかぎりをつくし、君主のため国のためには、自分を取るに足らないものだと思わずに、君主に少しでもあやまちがあつたなら、命をすていさめ教えて、君主を名君にそだて、自分は忠義をつくす家臣となつて、現在にいたるまでお手本となっているのでござい
ます。
いまの世の中は、君主に君主としての稽古や修行をさせることもなく、身分の高い家柄に生まれながら、すぐれた君主と後の世にたたえられる幸福と利徳を生まれつきもつていないかたがたも多くいるように思われます。まづいろいろな人間の活動を見られることであります。

劍術に名有人は、折々人に打たたかれ候人
が上手に相成申候。馬術に功者なる人は
折々落馬も致し候人が名人に相成申候。
一度も打れ不申、一度も落不申稽古修行もなく
て、直に達人に相成候人は無之候。人君も
幼年よりしばしば諫諍の臣に仕こめられ玉ひて、
折々赤面を被成候程の人が、いつにても明君
賢將に成玉ふことに御座候。是は今の世斗
にては無之、常々御覽被成候通、古今の書籍
に記し、聖賢の君と名を残し給へる君は、唯此稽
古修行の功を積玉ひし人々にて御座候。

劍術の名人は、そのときそのときに打ちたたかれる人
が、じょうずになります。馬術にたくみな人は、そのと
きそのときに落馬もするような人が名人になります。一
回も打たれず、一回も落馬せず、稽古も修行もしないで、
すぐに達人になる人はおりません。君主もおさなるとき
から、たびたびあらそってまでも強く目上をいさめる家
臣にしこまれて、ときどきはずかしくなって赤面するよ
うな人が、いつでも、すぐれた君主、すぐれた將軍にな
られるのでございます。このことは今の世ばかりではな
く、いつも見ておられるとおり、むかしからいまにいた
る書物にも書かれており、知識、人格のすぐれた君主と
して名をのこす君主は、ただこの稽古、修行の成果を積
み重ねたかたがたなのでございます。

世話せわ もうしそろうめくらへび
世話に申候せわにのたまふ 盲蛇めくらへびにおぢすと申のたまふことは、め
くらは勇氣ゆうきなるものにてへびを恐ぬと申のたまふ訳に
ては無之これなく、我われをさす蛇へびが目に見えぬ故ゆえに、をしげ
なく踏ふみつけて、足あしをさされ候そうろうと申もうす心こころにて御座
候そうろう。必竟ひつきよう学問がくもんを不致いたさず候得そうらえは、古今ここんの姿すがたをも
ぞんぜずなに、何おそあやぶみ恐れ候そうろう氣遺きづかひ用心ようじんも弁わきまへ
不申もうさず、無理むり無法むぼうの氣随きずい氣儘きままに相成あいなり候そうろうて、貴賤きせんと
もに浅あさましき謗そしり恥辱ちじよくを受け、人ひとと生うまれ候そうろう詮かん
も無之これなく、夢現ゆめうつとなく一生いっしょうを過すごし、草木くさきの枯朽かれくち
候そうろう様みに身みを終おわりたる跡あとは何花なんのはな香のかおりも残りのこ
不申もうさず、下賤げせん無智むちのものと同敷おなじく、苔こけの下露しもつゆと消きえはて
候そうろう事ことに御座候ござそうろう。

世間のはなしで、「目の見えない人は、へびを恐れな
い」というのは、目の見えない人は勇氣があつてへびを
恐れないからというわけではありません。自分をにらむ
へびが見えずに、簡単にふみつけてしまい、足に食いつ
かれてしまふといったことなのでございます。結局、学
問をしないと、昔から今にいたるまでの、いろんなこと
知らないの、何が危険で用心しなければいけないのか
がわからず、道理を無視して、わがままかつてにふるま
うようになってしまいます。そして、身分の高い人も低
い人も、ひどい批難をされて、はずかしめをうけて、人
として生まれてきたかもなく、ぼんやりとしたまま一
生を過ごし、草木が枯れてくちてしまったように生涯を
おえたのでは、何のあかしも残らず、下品であさはかな
者と同じように、すぐに消え去ってしまいます。

ぜんぶん もうしそろうとおり せせん み うま そうらえ
前文にも申候通、素賤の身と生れ候得ば、
ものごころぞん そうろう ひと このみ おわ そうろう
物心存じ候より、人は此身を終り候までは、
ふどうり ひと もうさず いっしやう いきとど
不道理にては人がゆるし不申、一生が行届かれ
もうさずそろうにつき なにとぞいっしやう あんらく ひと ひと
不申候付、何卒一生を安楽に人にも人らし
そうらわん ぞんじそうらえ かんにく
くいはれ候半と存候得ば、さまさまの堪忍苦
ろう いた さい ふさいそうおう しんりよく つく
勞を致し才不才相応におのれが心力を尽し
もうすこと そうらえ そのなか めいよけんたつ ひと おお
申事に候得ば、其中より名誉顕達の人も多く
できもうしそろうことどうせん ことわり
出来申候事当然の理に御座候。
きじん うま そうらえ みぎもうしそろうとおりしんろうくぎやう
貴人と生れ候得ば、右申候通心労苦行
ひと しりよしひと ひと われ われ いっ
も人にさせ、思慮思惟も人にさせ我は我にて一
しやう すむ もうすところ けんちゆうとく きみ まれなる
生は済と申所より賢知有徳の君は稀成もの
あいみえもうしそろう
と相見申候。

さきにもべましたように、身分の低い身の上になら
れて、ものごころがついたときより、一生をおわるまで、
道理にはずれているようでは、人がゆるさないの、一
生をまつとうすることができません。どうにかして一生
を苦勞をせず、人とつきあい、人らしく生きていこうと
するから、がまんして、苦勞して、才能と知恵があるな
しにかかわらず、みずからが力のかぎりをつくします。
そうしたなかから、すぐれた評価を得て、立身出世する
人が多く出てくるのも、当然のことです。
身分の高い人に生まれたならば、氣苦勞やつらさに堪
えることを他人にさせて、考えることも他人にさせて、
自分は自分だけの一生を過ごしていけるといふことから、
賢くて知恵があり、徳行にすぐれた君主がほとんどいな
いのでございます。

かよう もうしそうらえ われ われ すみもうしそうろう
ケ様に申候得ば我は我にて済申候て、辛苦
はいらぬものと申様に相聞候得共、人と生れ
候て人たるの知恵を天よりうみあたへ玉ひし
かひもありて、我が我より思慮思惟も致し候得
ば、心は我心にて、一生も我一生にて御座
候。其かひもなく人の思慮思惟にて終り候得
ば、我心とては無之、永き一生も人の一生
同様に、我身は有て無き物に御座候。

このようにいいますと、自分のことは自分だけで済んでしまい、つらい目にあつて苦しむことなどしなくてもいいように聞こえますが、せつかく人と生まれて、智恵を天から生みあたえられた値打ちもあつて、自分で自分のことをよく考えれば、心は自分のものとなって、一生も自分の一生となるのでございます。そうした値打ちもなく、他人の考えのまままで終わってしまったら、自分の心がなく、長い一生も、他人の一生と同じになつてしまい、自分というものがおりながら、ないのと同じことになってしまふのでございます。

これ こうしひにく もうし すいせいむし もうす
是を行尸飛肉とも申、醉生夢死とも申あぢきな
ひと もうしそうろう ただ それ おお
き人とは申候。但し夫とてもままにして、大き
あかご じょうげき どうよう よ おご もうしそうろう
なる赤子の上下着たる同様に世を過し申候
ひと ぜ ひぜんあく さた もうすにおよばずそうろう
人は、是非善悪の沙汰には及不申候。
くんこう ごかほうめ たくじんくん うま いでたま
君侯などは御果報目出度人君に生れ出玉ひ、
またそのうえ てんぶくばんにん おすぐ かよう みち
又其上に天福万人にも御勝れ、ケ様の道にまで
おたちいりなされそうろう ごせつもん およびもうし
御立入被成候て、かくまでの御切問に及申
そうろうこと まこと もつてちようじようめ できおんことにござそうろう
候事、誠に以重畳目出度御事御座候。

これを、行尸走肉（歩く死体、走る肉・生きていても無
価値な人間）（原文では、行尸飛肉となっている）とも、
すいせいむし
醉生夢死（酒に酔ったような、また夢を見ているような
心地で、なすところもなくぼんやりと一生を終わること）
ともいう、つまらない人というのでございます。
ただしそうしたことも、そのままにして、大きな赤ん坊
あか ぼう
が着物を着ただけのように過ごしていくような人であれ
ば、正しいことと正しくないこと、善いことと悪いこと
を教えるまでもございませぬ。
殿様であるあなた様は、よい運を授かって幸福に君主
の立場に生まれられ、またそのうえ、天から受ける幸福
が多くの人よりもすぐれており、こうした問題まで気づ
かれて、質問までされましたことは、たいへん喜ばしい
ことでございます。

いよいよますますじんくん けいこしゆぎよう おつみなされそうろう
弥 益人君の稽古修行を御積被成候て、

こうだい かがみ なりなされそうろうよう ぞんじたてまつり
後代までの鑑に被為成候様にと奉存

そうろう ぐろう しよけん べつだん ぎ ござなくみぎ
候。愚老が所見とても別段なる義は無御座右

もうしあげそうろうこと みなみなつねづねごらんなされそうろうてぢか
申上候事は皆々常々被成御覧候手近き

しよもつ これありそうろうどおり ござそうらえ たいりやく
書物に有之候道理に御座候得ば、大略を

もうしのべそうろうまで ござそうろう せいきよう
申述候迄に御座候。誠恐。

せんだつ ごせつもん つきぐ いもうしあげそうろうどころ けんりよ
○先達て御切問に付愚意申上候所、賢慮に

あいかないおよろこびになられそうろう おんことたいけいつかまつりそうろう
相叶御悦被成候との御事大慶仕候。

みぎ つきもはやせいし おいおいごせいちようなされそうらえ
右に付最早世子にも追々御成長被成候得ば、

くんこうごいつこのみ ござなく せいし じんくん ござしゆ
君侯御一己而已にも無御座、世子へも人君の御修

ぎようおこころつけられたきおほしめしにそうろうにつき みぎしゆぎよう ほうそく
行被付御心度思召候付、右修行の法則

いかがおこころえなさるべきや くわしくおききなられたきおほしめしにそうろう
如何御心得可被成哉、委敷御聞被成度思召候

おんことしようちつかまつりそうろう
との御事承知仕候。

ますます君主として努力して学ばれ、後の世まで手本

となられますようにと存じあげます。わたくしの意見も、

何か特別なことがあるわけではございません。申しあげ

ましたことは、すべて、いつもご覧になっておられる書

物に説かれていることでございますので、あらましを申

しあげました。心から恐れ入ります。

○さきごろのご質問につきまして、私の考えを申しあげ

ましたところ、お考えにかない、お喜びなされたこのこ

と、うれしく存じます。このことで、もうお世継ぎのか

たが成長されて、ご自身のことだけでなく、お世継ぎ

にも君主としての修行を心がけたいので、その修行の方

法をどのようにしたらよいのか、くわしく聞きたいとの

こと、承知いたしました。

さきのしよにもうしあげそうろうとおり じんくん 人君の御修行は常々

先書申上候通、ごらんになられそうろうししよごきよう 四書五経を初め、およそしよもついちまいお 凡書物一枚御

被成御覧候、ひら なされそうらえ ことごと 開き被成候得ば、そのこと 悉く其事のみにて御座候得

ば愚老不申上候共、ぐろうもうしあげずそうろうとも 御自見も可被成儀には御座

候得共、そうらえども 貴問に候得ば誰にも能存候事ながら、おこたえ 御答へ申述候。

貴意の通御自己切の御事は不及申上候

得共、えども 如何様世子御育ての義は、いかさませいしおそだ 猶更厚く御心

得も被為有度御事奉存候。

え ありなされたきおんことぞんじたてまつりそうろう

先のご返事にも申しあげましたように、君主としての修

行は、いつもご覧になっておられる四書五経をはじめ、

どのような書物でもいいですから一枚開かれれば、すべ

てそのとおりのことですので、わたくしなどが意見を申

しあげなくても、その書物をお読みいただければよろし

いのですが、あなた様からのご質問でございまして、

お答え申しあげます。

あなた様のお考えのとおり、あなた様ご自身のことに

つきましては申しあげることにはございませんが、どうし

てもお世継ぎのご養育につきましては、厚い思いがござ

いますよう。

すべ
もうすことこれありそうろう
惣てものはまづ、きたひと申事有之候。

なんばんてつ さんべんきたえ ごへんじゅつべん きたえ かね
南蛮鉄も三遍鍛より五遍十篇の鍛は金もよ

くねれあひ そうろう たちかたな いた そうろう
候て太刀刀に致し候ても、きれ

あじ よわ うち いた こ そうらえ
味もするどに御座候。天草櫓も削立の儘にて

は弱く、打はりを致し込み候得ば、しなひもよ

お もうさず ご ご そうろう ばんぶつ このど おり ひと うま
く折れ不申御座候。万物此道理にて人も生れ

たつ ひ さら かぜ いんよう しぜん かんだん
立より日に晒され風にもまれ、陰陽自然の寒暖に

みほね きた ご ご そうろう ひと おいたち もうす
身骨を鍛ひ御座候人は、無病壮健に生立申

こと ご ご そうろう
事に御座候。

あらゆるものには、まずきたえらうということがござい

ます。 なんばんてつ
南蛮鉄〔舶来の精錬した鉄〕も、三回きたえたも

のより、五回、十回と何回もきたえたもののほうが、鉄

もよくねれて、太刀、刀にしても、切れ味がするどくな

ります。〔槍の柄にする〕 あまくさかし 天草櫓も、削りたてのときには、

弱くて折れやすいのですが、打ち込みをすれば、よくし

なって、折れないようになるのでございます。あらゆる

ものが、このとおりでして、人も生まれたときから、陽

に当たり、風にあたって、陰と陽の自然の寒さと暖かさ

によって体をきたえた人は、病氣にならず健康で元気に

育つのでございます。

しかる きじん もうすもの うま このきた
然に貴人と申物は生れてより此鍛ひをうけ
たま そうろうゆえ きりよく しぜん うす
玉ふことなく候故に、氣力も自然と薄く、も
た しの ごぎ そうろう
のに堪へ忍ぶことかよわきものに御座候。され
なにごと きおり まいらず しだい とりあつか もうさず
ば何事も氣折には不参、次第よく取扱ひ不申
そうらえ じようじゆいたさず そうろう これによつて しゆうかん ゆだん
候得ば成就不致候。仍之まづ習慣を油断
いたすまじきこと ごぎ そうろう きせんとも こ おや
致間敷事に御座候。貴賤共に子はとかく親のま
いた そうろうこと ようねん みなら ききなら そうろうゆえ
ねを致し候事、幼年より見慣ひ聞慣ひ候故
ごぎ そうろう りようきゆう こ み つく りようや こ
に御座候。良弓の子は箕を作り、良冶の子は
かわごも つく なら そうろうこと しぜん ごぎ そうろう
裘を作り慣ひ候事自然に御座候。

しかしながら、身分の高い人というのは、生まれてか
らずつと、きたえられることがないので、氣力も自然と
うすく、ものごとに耐え忍ぶことに弱いものでございま
す。ですから、なにごとにも短気なことではなりません
ので、その取り扱ひをうまくしないと、成し遂げること
はできません。このため、まず習慣に、たかをくくつて
氣を許さないことでもございます。身分の高い者の子も身
分の低い者の子も、こどもはとにかく親のまねをして、
おさないときから見て習ひ、聞いて習うものだからでこ
ざいます。よい弓作りの子が、父に習つてやわらかい柳
の枝を集めて箕をつくることを学び、よい鍛冶屋の子が、
父のすることを見習つて、けものの皮をつなぎ合せて皮
ころも
衣を作る（父祖の遺業を継ぐという意味）のは、あたり
まえのことでもございます。

しから ことも ぜんぎよう いたさせたくぞんじそうらえ

然ば子共に善業を為致度存候得ば、まづ

親が善業を致し候て見せ申候事当然の

ことわり ござそうろう

理に御座候。

おこたち けんくん けいこしゆぎよう おしこみなされたく

まして御子達に賢君の稽古修行を御仕入被成度

おほしめしそうら ござこ おつとめなざるべきこと

思召候はば、まづ御自己に御勤可被成事

もうしあげるにおよばずそうろう しかしながら もうしあげそうろうとおわり

不及申上候。乍併いつも申上候通、

しもじも ことも ようねん おや とりあつか むぞうき

下々の子共は幼年より親の取扱ひも無造作にて

かのきた じようぶ あつ さむ たいくつたいぎ

彼鍛ひ丈夫にて熱い寒い退屈大儀もいやを

もうしいれさせずそうらえ すべ さぎよう しだい ころう

不為申仕入候得ば、都ての作業も次第に苦勞

なんぎ ぞんぜずつとめなら そうらえ なにごと おもしろ はや

難儀とも不存勤習ひ候得ば何事も面白み早く

つきもうしそうろう たてもうさずそうらえどもみ

付申候て、さのみせがみ立不申候得共見る

み きく きき

を見まね聞を聞まねに、いつとなく上手名人に

相成申候。

あいなりもうしそうろう

だから、こどもに善いことをさせようとするならば、

まず親が善いことをして見せるのがあたりまえのことで

ございます。

なおさらお子たちに賢明な君主になるように修行させ

たと思われるなら、まずご自身がそれに勤められること

は、いうまでもありません。しかしいつもお話しており

ますように、下々のこどもは、おさないときから親の育

て方も無造作で、きたえかたもしっかりしており、暑い

とか、寒いとか、退屈だとか、難儀なことだと思わず

に勤め習えば、なにごともおもしろくなってきて、それ

ほど責めたてなくても、見よう見まね、聞くを聞きまね

で、いつのまにかじょうずになり名人になるものです。

こうりよのせいおしえがたし いにしえ もうしそろう
膏梁之性難訓と古より申候て、うまくた
あたたか き もの きがねきづか お たちたま
べ 暖に着て物に気兼氣遣ひなく生ひ立玉ふ
きじん うま おちる せんごさゆう いと
貴人は、生れ落より前後左右が厭ひいたはり
そろうこと せんよう いた そうらえ ものごと つとめられ
候事を専要に致し候得ば、物事しひて被勤
そろうこと はなはだむつかし こと ごさそろう
候事は甚難き事に御座候。げに下賤の
みぶん ちが ぐんしんさゆう いぎよう ばんみん うえ
身分とは違ひ群臣左右に圍繞せられ、万民の上に
たてられそろう とうと みぶん そうらえ しもじもどうよう おし
被立候て、尊き身分に候得ば、下々同様に押
おしさ とりあつか もうすべきわけ もちろんこれなく きげん
つけ押下げて取扱ひ可申訳は勿論無之、機嫌
うかが ほどよくとり しゆぎよう つのりそろうよう いたすべき
を伺ひ程能取かひ、修行も募候様に可致
ごと そうらえども しかしこの ころもちしだい
事には候得共、併此いたはりての心持次第にて
もつて ほか まちが あいなりそろうこと ごさそろう
以外の間違ひに相成候事に御座候。

うまいたべものばかりたべているような性質の者を教育
するのはむつかしいと古くからいます。うまいものを
たべて、暖かく着て、ものごとに何の氣づかいもしない
で育った身分の高い者は、生まれたときから、まわりに
いる世話係が、面倒をみるので、ものごとをむりにさせ
ようとすることは、とてもむつかしい。身分の低い者と
ちがって、多くの家臣にとりかこまれて、万民の上に立
てられた、尊い身分であるので、下々の者と同じように、
押さえつけて押さえつけてさせるようにはできないので、
ようすを見つつほどよく取り扱って、修行が積み重なっ
ていくようにするわけですが、しかしこうした取り扱い
が、取り返しをつかないまちがいなのでございます。

真実しんじつに主人しゅじんを大切たいせつに存ぞんじ、行々ゆくゆく賢明けんめいの主ぬしにもな
られ候そうろう様ようにと、思おもひはまり候そうろう侍臣しんばかり計けいに候そうら
得えば、常々つねづね勞らうはりかしづき申もうし候そうろう内うちにも、為ために
相成あいなり候そうろう筋すぢを昼夜ちゆうや心得こころえ居おり候そうろう事ことに候得そうらども、
先書さきのしょにも申もうし候そうろう通とおり、当座とうざの機嫌きげんのみを伺うかがひ、
我われ不首尾ふしゅび致いたさぬ様ようにとのみ心得こころえ候そうろう人計ひとけい立並たちなら
び、介抱かいほう致いたし候得そうらば、兎共こどもに飴あめと申もう譬たとえの通とおり、
虫むしの出いで候そうろうは不厭いとわず、あまい言ことばをのみ進すすめ申もうし
候そうろう。是これを君きみに鴆毒ちんどくをすすむる邪佞じゃねいの臣しんと申もうし
候そうろう。此所このところを弁わかまへられ候そうろうが、人君じんくんの稽古けいこの
最初さいしよ第一だいいちに御座ござ候そうろう。

本心から主人を大切だと思ひ、さきざき賢明な君主にな
られるようにと考える侍臣ばかりであれば、いつも仕え
るなかにも、ためになることを昼夜心がけるでしょう。
しかし、先に申しあげたように、その場のきげんだけを
うかがって、自分だけは失敗をしないようにと思ふ者ば
かりが、世話をすれば、こどもに甘い物だけをあたえる
といったたとえのとおり、害になるようなことでも、あ
まいことばだけをかける。これを、君主に猛毒もうどくをあたえ
るへつらう家臣といひます。このことをわかまえられる
ことが、君主の練習のまず最初に大切なこととございま
す。

さてどく さてどく 扱毒はすすめ申間敷と存じ候人は、必当座 もうすまじく ゑん そうろうひと かならずどうざ
の機嫌には随ひ不申、苦み計を申物に御座 きげん したが もうさす くるし ばかり もうすもの ござ
候。 そうろう にが むし くすり せわ もうしそうろうとわり 苦けれども虫の薬と世話にも申候通、
虫の薬はにがきに勝る物は無之候故に、古今 むし くすり すぐ もの これなきそうろうゆえ ここん
の名将賢君と申程の人は、この苦口をきく人 めいしょうけんくん もうすほど ひと ながくち ひと
を秘蔵致され候て、甘みを申家来を厭ひ嫌は ひぞういた そうろう あま もうすけらい いと きら
れ候事に御座候。但し人情と申物は、我と そうろうこと ござそうろう ただ にんじょう もうすもの われ
我同志の間柄にても、人の気にはきはらぬ甘い わがどうし あいだがら ひと き あま
言は申よく、機嫌不構に苦口は申悪き物に ことば もうし きげんかまえずに ながくち もうしにく もの
御座候。

毒をすすめない人は、かならずその場のきげん機嫌をう
かがわず、本人のためを思つて、言いくいところまで
あえて言つて、いさめるものです。にがいけれども害虫
の薬と、世間でもいうように、害に対する薬は、にがい
ほどいいのです。おかしからいまにいたるまで、名将、賢 けん
君といわれたほどの人は、この本人のためを思い、言い
にくいところまであえて言つて、いさめる人を、大切に
され、あまいことをいう家臣をきらわれました。ただ、
仲間うちにおいても、人の気にさわらないあまいことは
は言いやすく、きげんをそこねずにいいにくいことを言
うのは、おつかしいことでございます。

まして主君の威は、雷霆よりも恐きものに御座候得ば中々並々の氣丈にては齒に絹きせず申事は、至て難成事不及申候。然ば御子達へ賢君の稽古をさせられ度思召候はば先づ此輩を御撰み御附被成候事、最第一の儀とおぼしめさるべくそうろう。其上にては御修行の被成方御思惟次第、何様にも相調ひ可申事に御座候。已上。

なおさら主君の威厳は、カミナリよりも恐ろしいもので、なかなか並の気持ちの者では、はっきりと言うことはむつかしい。ですから、お子たちに賢君となる稽古をさせようと思われるならば、まずこうした家臣を選んで、お付けになることです。それがまず第一に大切なこととお考えください。

そうしたうえであれば、御修行のされかたはお考えしないで、どのようなにもなるのでございます。以上。

○人君じんくんの側そばには兎角とかく正直しょうじきにもものを申人もうすひとを

被召使めしつか候わかれそうろうが第一だいいちと兼々かねがね被思召おぼしめされそうろう候ところ所ぐろう、愚老

御答申おこたえもうし候そうろう趣おもむきと符合致ふごういたし候そうろう付つき、御安悦ごあんえつ

被成候なされそうろうとの御事大慶おんことたいけい仕候つかまつりそうろう。乍併是非しかしながらぜひ

善悪ぜんあくを明あきらかに致弁別べんべついたし、正直しょうじきに申述もうし候程べそうろうの

人ひとに、御事おんことを被見みせられ候そうろうとの御事おんこと、御尤ごもつともに承知しょうち

仕候つかまつりそうろう。如何いかさま何方いずかたにても御家来ごけらいは数多あまたに

御座候ごぎそうろうても、右みぎの筋すじを耽しかと弁わきまへ君くんを諫言かんげんなど

仕候程つかまつりそうろうの人ひとは、沢山たくさんには無之物これなきものに御座候ごぎそうろう。

○君主きんしゅのそばには、とにかく正直しょうじきにもものを申す者を召し

使うつかうことがもつとも大事だいじだとお考えであるとのことにつ

きまして、わたくしの考えもそのようであったことに安

心こころなされたとのことで、よろこんでおります。それで、

正しいことと正しくないこと、善いことと悪いことを、

はっきりと正直に言う者を、(若君わがきみに)見せられたいとの

こと、もつともなことです。じっさい、どの国でも家来

はおおぜいいますが、これまで述べてきたような、筋を

きちんとわきまえて、君主きんしゅに忠告ちゆうこできるような者は、そ

れほどいないものでございます。

だれ ぬし もらそうろうひと わがきみ 誰とても主を持 候 人は、我君あしかれと存 ぞんじ

そうろうひと ひとり これなくそうらえども

候 人は一人も無之候得共、心に弁へ覚え わきま

そうろうちから これなくそうらえ もうしあげたきぎ もうしのべるべきさま

候 力無之候得ば、申上度儀も可申述様も

ぞんぜず くちだ いたしがたく しんちゆう

不存、むさと口出しも難致、心中には不快に ふかい

ぞんじ そうらえども そうろう そのひ

存 候得共、おしだまり候て、其日其日を過し

もうし そうろうこと よぎ こと ござ そうろう

申 候 事げに余儀もなき事に御座候。されば

なき ぞとて すておかれそうろうどうり これなくそうらえ

候 道理も無之候得ば、そろ

もうす で き そうろうよう おこころがけられたきぎ

そろ申ものの出来 候 様に被懸御心度儀と

ぞんじ たてまつり そうろう

奉 存 候。

だれでも主人を持つ人は、その君主が悪い人であるように
にと思う人は、ひとりもおりませんが、きちんと心に命
じてわきまえている力がないと、言うべきことも言わず、
軽はずみに口出しもできず、こころのなかでは不愉快な
ことだと思っけていても、ひたすらだまって、その日その
日を過ごすようなことで、まったくほかにとる方法もあ
りません。そうしたときは、ほかに方法がないとほかっ
ておくしかないということでもありませんので、ぼつぼ
つとでも、ものを言う者が出てくるように心がけていた
だきたいことと存じあげます。

是非善悪を弁へ申候人の出来候様にと

申候手段は、人に道理を知せ申事に御座候。

人に道理を知せ申候手段は、学問を為致候事に

御座候。学問を為致候は、まづ大学の道はと読

み習はせ申事に御座候。よみ覚え候得ば、其訳を

存度相成候事人心の常に御座候。一つ承

り二つ承り、数をかさね申候得ば、物事の

しれて参り候事人心の靈妙なる所に御座候。

心に知れば口にも申され、身にも被行候事も、又

自然に御座候。

正しいことと正しくないこと、善いことと悪いことをわ
きまえた人がでてくるようにする方法は、人に道理（も
のごとのすじみち）を知らせることです。人に道理を知
らせる方法は、学問をさせることです。学問をさせるこ
ととは、まず「大学の道は」と読み習わせることです。
読みおぼえれば、そのわけを知りたくなるのが、人の心
のいつもかわらないところです。ひとつ聞き、ふたつ聞
きしてかずをかさねていくと、ものごとを理解すること
ができるようになるのが、人の心の奥深くすぐれている
ところです。心でわかれば、口に出して言うこともでき
るようになり、実行することもできるようになるのが自
然なことなのでございます。

世話にも申候通、習はぬ経は読れぬと申事は、
聖賢の上にも同様に御座候。世に物知りと申人
も、習はぬむかしは素人にて御座候。然故に御
覽被成候通、古より聖王賢君の天下国家を治
め給ふ道も、まづ人を人に教へたて候が、治道
の手初に御座候。人に善悪を弁へさせず、善を
せよ悪をするなど申事は天子の御威勢にても
不参儀に御座候。御家中の輩も学ぶと申事、よ
きことと申訳を存候はば、誰かひとり不学の
ものは有之間敷候。

世間でも言っておりますように、「習わぬお経は、読めま
せん」というのは、聖人でも賢人でもおなじです。世間
で物知りといわれる人も、教わったことを繰り返して練習
して身につける前は、何も知らない人だったのです。で
すから、ご存じのように、おかしから徳のすぐれた君主、
賢明な君主が、天下、国家を治める道筋も、まず人を人
に教えることが、国を治めることのはじめでした。人に
善いことと悪いことをわきまえさせずに、善いことをし
なさい、悪いことをしてはいけませんということは、い
くら君主の人を恐れ従わせる力であっても、できないこ
とです。家中の者も、学ぶことはよいことだと思おうよう
になれば、だれも学ばない者はいなくなるでしょう。

愚老弱年の時、人の咄はなしに承うかたまわり候事有之候。或これあり主人せいとく生得学問嫌ひにて、常々被申出候事も不道理つねづねもうしだされのみにて一家中致迷惑めいわくいたしそろうにつき候付、家臣共存付候どもぞんじつきて、兎角少々講談にても被承うけたまわれそろう候はば道理も分とかくり可申と申合、色々とすすめ候て、儒者を招もうすべくき大学の講釈を初め申候所、一座被承もうしあわせ候内うちいかう退屈にてふさぎ被申候哉、目を舞し被申もうされ候付、夫よりいよいよ嫌ひに被相成、講釈と申あいなられものは、人には大毒とてふつつ聞不被申候おおどく付、弥不道理もついよいよのり気儘きまま氣随きまに物ごときまきずい被申出候て、兎角家中の迷惑不大形候おおきからずかたにそろう付、

わたくしが若いときに、人に聞いた話があります。それはある君主が生まれつき学問が嫌いで、いつも言うことが道理にかなっておらず、家中が迷惑しており、家臣どももそれに気づいており、とにかく少しでも講談を聞けば、道理がわかるようになるだろうと、相談して、いろいろとすすめて、儒者を招いて『大学』の講釈をしてもらいはじめたところ、講釈を聞いているうちに、とても退屈をして、ふさぎこむやら、目をまわすやらして、それから講釈がいやになって、「講釈というのは、人には大毒だ」と言っ、きっぱりとやめてしまわれた。それで、さらに不道理になって、きまに好き勝手にふるまうようになって、家中の迷惑は一段と大きくなったので、

大臣共又候色々訴訟致し、せめて一座御聞被下おもまたぞろいろそしやう おききくだされ

候得とて、又或儒者を招き講談を為致候所、初またある いたさせ ところ はじめ

の程は又目を舞し可申かとて甚不安心の容子ほど まため まわ もうすべき はなはだふあんしん ようす

に御座候所、右の儒者如何様に講じ候哉、殊の外いかさま や こと ほか

に面白く被存、一向退屈の体もなく候付、家臣ぞんぜられ いっこう てい

共も甚致大悦、まづ短かく申候様にと、はなはだおよろこびいたし もうしそろうよう

側よりさきさきやき候付、能程に講を休め申候得そば そろうにつき よきほど

ば、扱扱面白事に候、嘸大儀には可有之候得共、さてさておもしろきこと さぞたいぎ これあるべくそらえども

可相成は今一度承度との儀にて、夫よりはあいなるべく いまいちどうけたまわりたき ぎ それ

常々講日を被待兼被承候付次第に道理もつねづねこうじつ まちかねられうけたまわれそろうにつきしだい

合点参り、後々は余程ほめ候程の主人に被相成がてんまい のちのち よほど そろうほど あいなられ

候由、よし

家老どもがまたいろいろとうつたえて、せめて今一度お

聞きくださいといつて、またある儒者を招いて講談をさ

せたところ、はじめのころはまた目をまわすかと、とて

も心配のようすだったが、その儒者がどのように講釈し

たのか、思いのほかおもしろくおもわれて、ずっと退屈

することもなかったので、家臣らもとてもよろこんで、

とにかく短く話すようにと、そばからさきさやいたので、

適当に休みながら講釈をすすめたところ、これはこれは

おもしろい、たいへんなことだろうが、できれば、もう

一度聞きたいとのことで、それから、講義日を決めて、

まちかねて講釈を聞かれるようになり、しだいに道理を

わきまえられて、のちには、たいへんほめられるような

君主になられたとのこと。

きだめ はじめ
定て初の儒者はこと六ヶ敷自分が多年の精学
の功を其座きりに向へも、会得為致度、微妙の
道理を細かに説たるにて可有之候。然故にうみ
うみ敷被承候耳には何の事に候哉、一向訳
も聞え不申候付、退屈も被致候事、断成儀に御
座候。

あと きだめ こうしや
後の儒者は定て功者にて、書面の通誰も彼も
会得の相成候筋を大さやかにすらすらと講じ
候付、被承候に随ひ、道理も分明に分
り、実に実に面白く被存候筈の事に御座候。惣て
諸芸共に、しらぬ人が嫌ひに相成候物に御座候。

きつと、最初の儒者はことむつかしく長年にわたる自分
の研究成果を、相手にも理解させたいと、こまかい道理
まで説いたのでしよう。ですから、はじめてで気持ち
落ち着かない状態で聞かれたので、何のことやらさっぱ
りわからず、退屈もされたのは、あたりまえのことです。
あとからの儒者は、きつとたくみな人で、書いてあるこ
とをだれでもがわかるように、はっきりとすらすら話さ
れたから、聞くにしたがって道理もあきらかになり、ほ
んとうにほんとうにおもしろくなられたのでしよう。ど
んなことも、知らない人が、嫌いになるものでございま
す。

茶の湯蹴鞠能囃子けまりのうはやしにても、しらぬ内うちは退屈たいくつにて、
少しも其道そのみちを存ぞんじ候得そうらえば、面白あいなく相成そうろう候事こと、
人情にんじやうにて御座候。是これによつて世話へたにも下手へたが嫌きらひ
になる、上手うまいが好きすきになるとも申もうし、嫌きらひが下手へた
に成なり、すぎが上手うまいに成共なるとも申候。兎角世とかくの中まは間違まちが
多おほき物ものに御座候。我主人われしゆじんは嫌きらひと申家来もうすは、ま
づ家来わがが嫌きらひに御座候。我家来わがが嫌きらひと申主人もうす
は、先まづ主人まが嫌きらひ成物なるものにて御座候。嫌きらひか好きすき
か、なるかならぬは、致いたして見不申候みえもうさずそうろうては難決きめがた
物ものに御座候。

茶道、蹴鞠、能、囃子でも、知らないときは退屈ですが、
少しでもその道のことを知ると、おもしろくなるもので
す。それが人情というものです。ですから世間でも、下
手が嫌きらいになり、上手うまいが好きすきになるといい、嫌きらひが下手へた
になり、好きすきが上手うまいになるといいです。とにかく世の中
は、まちがいが多いものです。自分のつかえる殿様が嫌きら
いだという家来は、まず家来がはじめからいやがついて
るのです。自分の家来が嫌きらいだという殿様は、まず殿様
がはじめから家来をいやがついているのです。嫌きらひか好きすき
か、できるかできないかは、してみせないと決められな
いことをごさいます。

されば人々の学ぶ心に相成候は、上一人の

心持が本に御座候、善悪利害を弁へ、人に利害

を能教へ諭し申ものを、一兩人も御引立被成候

て、御賞翫被成候得ば、誰も御賞翫には預り度、

其内には才不才の差別は可有之候得共、其人

相応に知恵もひらけ、道理の分り候程には相成

候事相違無御座候。但し夫とても差当り御手元

に相応の人柄無之候はば他所他国の人にてても

御注文に叶ひ申候人を御雇ひ可被成御事に

御座候。

ですから、人びとが学ぶ心になるのは、君主〔上に立つ

者〕の心持ちがもとになります。善いことと悪いこと、

得することと損することをよくわきまえて、人に得する

ことと損することを、よく教えてわからせる者を、ひと

りでもふたりでも引き立てて、尊重されれば、だれでも

尊重されたいので、才能があるかないかの別はあります

が、その人なりに知恵をつけ、道理もわかるようになる

ことはまちがいありません。ただし、そうはいつでも、

とりあえず手元にそれ相応の者がいなければ、他国の者

であっても、自分の希望する条件にあう者がおれば、お

雇いになるべきでございます。

雇ふと申事は恥にはならぬ事と相見申候。先大
きく申候はば、天地の妙用にてても聖徳の天子
を御雇ひ被成候て、陰陽造化の功を助けて御も
らひ被成候。天子は諸侯を御雇ひ、四海を治め玉
ひ国主領主は家老諸役人を御雇ひ、領分の世話
をさせられ、侍は鎧持仲間をやとひ、奉公の
働を助けてもらひ申候。ちいさく申候はば、
人の心の臓は一身の主ぞう いっしんに候得共、手足を雇ひつ
かみさすり、あるきはこびも仕候。其手足も大
指計にては不参、中指小指の手伝ひを雇ひ不申
候得ば、なでさすりも叶ひ不申候。

雇うことは、なんの恥にもなりません。大きくみてみる
と、天地のひじょうにすぐれた働きも、最もすぐれた知
恵を持つ天子を雇うことによって、陰と陽の天地の間の
一切の万物を創造することをたすけてもらっています。
天子は諸侯を雇って世界を治め、国主、領主は家老や諸
役人を雇って領地の世話をさせ、さむらいは槍持や中間
(雑務者)を雇って奉公の働きをたすけてもらっている
のです。ちいさくみれば、人の心臓は、からだの根本で
すが、手足を雇ってつかみ、さすり、歩いているのです。
その手足も、おやゆびだけではだめで、なかゆび、こゆ
びを雇わないと、なでること、さすることでもできませ
ん。

もうし みそうら とうと おかたほど おいれ
申て見候はば、尊き御方程雇ひを多く御入
なされそうろうこと ここんこうめい いきおい
被成候事に御座候。古今高名の武将も、勢を
もちたま たいしんたいか つな
多く雇ひ持玉へる人が大身大家にて御座候。綱、
きんどき むさしぼう おのれひとり いちじん いくさ
公時、武蔵坊にても、己一人にては一陣の戦は
もた もうさずそうろう そうろうこと びもく
持れ不申候。されば雇ひ候事は美目なること
ちじよく ぞんぜられ おそれながら
にて、恥辱にはならぬことと被存候。乍恐東
だいしようみよう よく あそばされ ゆえ
照宮は六十余州の大小名を能御雇ひ被遊候故
かくのごとくいっとう あそばされ
に、如此一統太平を被遊候。

そうしてみると、徳の高い人ほど、多くの人を雇って
ます。古今の名だたる武将も、他を圧倒する力を持つ者
を多く雇っている人が、大家になっています。あの強い
武将である渡辺綱（源綱）、坂田金時、武蔵坊弁慶でさ
え、自分ひとりだけでは戦をすることはできません。で
すから、雇うということは、りっぱなことであって、体
面をきずつけるものではないとお考えください。おそれ
おおいことですが、東照宮（徳川家康）は、六十あまり
の国の大名、小名を、うまく雇われたから、いまのよう
に太平の世を築かれたのです。

他山の石たざん以て砥もつとすべしといしと申詩もうすしの教へは、常々
被成御覽候事ごらんなされ ことに御座候そうしゆうもの。相州物そうしゆうは相州の砥といしに
てとが 研そうろうず候ては、きれぬと申もうすわけ訳は無これなく之候。
扱さてやと雇もうすときひと申時は師匠ししやうを一人御雇なされひ被成候事なされに御
座候なされ。師匠は一人にては百人は教へられぬと申事
は無御座候ござなく。一人に申聞もうしせ候道理も、百人千人
に申聞もうせ候道理も、道理は同じ道理に御座候もう。申
さば一人も多く集め候て申聞もうせ候得ば、承り候人
も我身の上と計ばかりは不存ぞんぜず、

「他山の石たざん以て砥いしもつとすべしといし」(「他山の石以て玉おきを攻む
べし」・よその山から出た質の悪い石でも、自分の玉を磨
くのに役立つことができる。転じて、他人の誤った言
行でも、自分の修養の助けとなるということ)という『詩
経』の教えは、いつもご覧になっておられることです。
相模で作られた刀剣は、相模の砥石で研がなければ切れ
ないというわけではありません。
さて雇うというときは、師匠をひとり雇うことです。
師匠ひとりで百人を教えられないということはありませ
ん。ひとりに教える道理も、百人、千人に教える道理も、
道理はおなじです。ですから、ひとりでも多くの人を集
めて話せば、聞く人も自分のことだけとは思わず、

たとひ身に覚へ候き氣の毒どくなる儀ぎ有これあり之候ても、
恥はずかしき敷とて顔を赤め申事もなく、心のどかに公おおやけ
に承うけたまわり候内には、人々己々何となく存当り
思廻おもいめぐらし、道理も得と合点の参る物に御座候。
主人一人へ指向さしむかひ申候時は、主人計ばかりを異見致いけんいたし
候様に相聞あいきこえ、家来へ計申聞ばかりもうしきかせ候得ば、家来
計を戒め候様に聞うけたまわえ候物に御座候。君臣くんしん
一同に承うけたまわり候得ば、君の心得こころえも有これあり之、家来の
心得これありも有かみ之、上かみがよければ下しもの為ためもよし、下しもがよ
ければ上かみの為ためもよしと申道理もうす分明ぶんめいに弁わきまへしら
るることに御座候。

たとえ自分がみじめな思いをして、恥はずかしくなつて顔を赤くしたりすることもなく、心安らかに表向きに話を聞きくうちには、人びとそれぞれに何となく思い当り、思おもいをめぐらして、道理もよく理解するものです。君主にのみ講釈するときには、君主のみに意見を述べているように聞こえるし、家来にだけ講釈するときには、家来だけの注意しているように聞こえるものです。君主と家来かみの一同が、講釈を聞けば、君主としての心得こころえるべきことがあり、家来として心得るべきことがある。上に立つ者に良いことであれば、下の者にとっても良いことであり、下の者が良ければ上の者にとっても良いことであるという道理が、あきらかにわかるのでございます。

併し師かしを尊もうすぶと申もうさす道をまづ心得まいらず不申候ては不参まいらず事ことに御座候。古今ここんとも共に師を尊敬つかまつり仕候事ことは、重きこき道に御座候。申せ聞ふと申様成疎未成もうすようなるそまつなることにては何なにを承うけたまわり候ても無益なることに御座候。
これによつてこせんせいおう
依之そんすうなされ古先聖王より後世の明君賢王に至るまで、
師を尊崇被成つねづねごらんなされ候事は常々被成御覧候書面の通とおり
に御座候。唐土とうどの昔昔計むかしむかしばかりにても無御座、我朝ごさなく
代々の天子親王の御上おんうえにても師臣ししんを尊寵被為在そんちようありなされ
候次第しだいは、物語り等などにも書伝かきつたへ、殊ことの外ほかにうやう
や敷しくだいじ大事なることに相聞申候。あいききもうし

しかし、師匠を尊敬するということを、まずわからなく
てはなりません。古今ともに、師匠を尊敬することは、
重要なことです。言ってみよ、聞いてやろうというよう
な、ないがしろにするようなことでは、どんなことを聞
いても何の役にもたちません。ですから、古代の徳のす
ぐれた君主から、後世の賢明な君主にいたるまで、師匠
を尊敬されたことは、いつも読んでおられる書物のお
りです。これは、中国の古い話というだけではなく、わ
が国の代々の天皇におかれても、師としての臣下を尊敬
されたことは、物語にも伝えられ、特別にうやまい大事
にされたと聞いております。

まずこのだん きつと、御思惟被成候はば、夫よりして
先此段を急度、とうごようだて 御家臣等御用立候人あまた出来申候て、のちのち 後々
は外よりほか 師匠を御雇ひ被成候には及申間敷候。なされ
如何様よき田地にても、種をま 蒔き不申候て、もうさず はへ
申候苗は無之候。已上。いじよう

まずこのことを、よくお考えになられれば、家臣から登
用すべき者が、大勢出てくることでしょう。そうすれば、
そのあとに師匠を雇うというようなことはしなくてもよ
くなりましょう。とにかく、良い田畑でも、種をまかな
ければ、生えてくる苗はありません。以上。

○先書せんしょの趣おもむき 御覽被下くだされそうろう候所、兎角とかく御家中によき

種を御蒔被成度思召おまきなられたきおほしめしに付、右種みぎたねに相成候人を御

雇なさるべくおほしめしひ可被成思召候得ば、猶又種なおまたの美悪びあく撰えらみ方かた

委敷申上候様ようにとの御事承知おんこと仕候つかまつり。

まづ人の才能いちようは一樣これなくには無之、得手不得手有之事これある

に御座候得ば、一人これなきぎに十善ぞんぜられを備候事そなえは、聖人の

外これなきぎには決ぞんぜられて無之儀と被存候。

○先にお出ししました手紙の内容を御覧になって、とに

かく家中によい種をまきたいとお考えで、そうした種

になる人を雇いたいとのこと。ついては、その種の善し

悪しの選び方を詳しく知りたいとのこと、承知しました。

まず、人の才能は、同じではありません。得意なこと、

不得意なことがありますので、ひとりに十善がそなわつ

ているのは、聖人しかいないと思います。

注 十善とは、殺生せつしょう（生きものを殺すこと）・偷盜ちゆうとう（ものを盗む

こと）・邪淫じゃいん（よこしまで、節度のないこと）・妄語もうご（うそをつく

こと）・綺語きご（真実に反して言葉を飾りたてること）・兩舌りょうぜつ（二

枚舌をつかうこと）・悪口あつこう（人を悪く言うこと）・貪欲どんよく（ひじよう

に欲が深いこと）・瞋恚しんい（自分の心に逆らうものを怒り恨むこ

と）・邪見しやけん（誤った考え方）の十悪を犯さないこと。

乍しかしながら 併なされたく 善なされたく 種なされたく にも被成度思召候はば、大概不具合たいがい
なることのすくなき人を種なされたく に被成度候。不具合と
申候は、昔より学問を尊たび候事は、学べび候へば心
もけなげに、道理も明しよぎようかに、所行も正敷相成候ただしくあいな
を尊しかるところび申事に御座候。然しかるところ 処学ものしりび候て、物識ものしりには
成候得共なりそうらえども、志行正しこうしからず、不義不信の沙汰多さたく
世間そのに聞え候人は、其学問そのとは喰違くいちがひ候付、是そうろうにつき
を不具合人ふぐあいびとと申事に御座候。

しかしながら、良い種にしたいと思われるなら、だいた
い不都合なことの少ない人を種にしたいものです。不都
合というのは、むかしから学問を尊ぶのは、学べば心が
けがよく、しっかりとして、人として行すべき正しい道
をわきまえ、行ないも正しくなるからです。それを、学
んで物知りになっても、志と行ないが正しくなくて、人
として守るべき道にはずれ、誠実でないと世間で言われ
ている人は、学んだことと食い違っているから、こうし
た人を不都合な人と言うのでございます。

一つ二つをあげて申候はば、孝悌は美德と申事
ぞんじながら 自身しよぎやうの所行おやあには親兄ぞんじながらにもしほらしから
ず、驕傲きやうごうと申は不徳なることと乍存ぞんじながら、我一人
ものしりと心得、人を見下し古賢先輩こけんせんぱいをむさと
誹謗ひぼうし、誠の賢者は、我よき道理も、若や心得違もは
ひにては有之間敷哉これあるまじきやと、恐れ氣遺きづかひ候をこそ、謙
讓しょうの徳と称しょうし候事なるを、さまで見出みだしたるこ
ともなきを珍敷大相めずらしくたいそうに申唱もうしとなへ、ただ俗人を驚し
申事を、自己の手柄と心得候を、古人は学ぶ所に
そむきたる人と申候て、不具合の甚敷はなはだしきひとに御
座候。

ひとつふたつ例をあげますと、父母に孝行で、兄によ
くしたがることは、道になつた行ないであるというこ
とを知っていないながら、自分自身は親、兄に遠慮深くて奥
ゆかしくない。他人をあなどり、思い上がった態度をと
るのは、人の行うべき道に反することであると知ってい
ながら、自分だけが物知りと思い、人を見下して、昔の
賢人、先輩を考えもなく悪く言う。本当の賢者は、自分
で良いと思う道理も、まちがえてはいないだろうかと恐
れ、氣づかうからこそ、へりくだりゆずる、すぐれた品
格を持つ人とたたえるのですが、それを大したことでな
いようなことを、めずらしいことのようにおおげさに言
って、ただ普通の人を驚かすことを、自分の手柄と思っ
ている人を、むかしの人は学んだことにそむいていると
言って、不都合なことがはなはだしい人でございます。

かよう
ケ様なる軽薄の人、種に相成候得ば、見るを見ま
ね、聞きくを聞きまねに、何なにわる心もなき素人も、なま
なかこの学問故ゆえにもて余あましたる人に相成候事、
世上すくなからずに不すく少候。

種は一粒そうらえどもに候得共みのり候得ば千粒万粒にもは

びこり候間あいだ、先まず大事成儀御座候。但し行跡正しぎようせき

ければ師匠は夫計そればかりにて事済ことすむとも難もうしがたく申候。師匠

と申時は人の問を待ものに御座候。十の内三つ四

つは不わきま存候共、残り六つ七つ位は弁わきまへ居おり

不もうさず申候ては、人の信仰も生じ不もうさず申候得ば、博はくがく学

多識たしきもちろん勿論の事に候。

このような言葉や態度が軽々しくて、思慮の深さや誠実
さが感じられない人が、種になったのなら、その人の見
まね、聞きまねをして、何の悪い心もない人も、中途半
端な学問の影響を受けて、どうしようもない人になって
しまう。そうしたことが、世の中に少なくありません。

種は、一粒であっても、実りさえすれば、千粒、万粒に
もひろがっていきますので、まずそのことが大事です。
ただし、行なってきたことがらが正しいだけでは、師匠
とはいえません。師匠とは、人の質問を待つ人です。十
のうち三つ、四つはわからなくても、残りの六つ、七つ
ぐらいは知っていなければ、人の信用を得ることはでき
ませんので、ひろく種々の学問に通じていて、知識が多
いことは、もちろんのことです。

然し唯博識多才而已にて、躬行の美無之人を用

ひ申候時は、貞宗、正宗如何に結構なるわざもの

とて拔身のままにて腰に指候同様にて、用心と

存候内に、いつか自身の怪我を取出し申候、

左候得ば先素志素行を失ひ不申人を師長に御用

ひ可被成事御座候。素志と申は幼年より存込

み候よき志をいつ迄も持通し候事に御座候。素行

と申は幼年より平生所行よろしく、壮年に相成

候ても、右の善き行をたゆまぬ人を素行ある人

と申候て、はえぬきの人間に御座候。

しかしただ、ひろく種々の学問に通じていて、いろいろ

な才能をもっていることだけで、みずから実行しないよ

うな人を採用したときには、貞宗、正宗（ともに有名な

刀鍛冶）のような名刀を、抜き身のまま腰にさして、用

心をしなければと思っっているうちに、自分がけがをして

しまうようなものです。ですから、まず素志素行を失な

わない人を先生に採用されることです。素志というのは、

おさないときからいだいた良い志を、いつまでも持ちと

おすことです。素行というのは、おさないときからふだ

んの行ないが良く、壮年になっても、その良い行ないを

なまけない人を、素行のある人といって、はえぬきの人

間というのでございます。

但し少年の時は不都合なるしよぎよう成所行も有之候得共、成た

長の上良師良友の助たすけにて、志行を改め有徳の士

になり候人も数多有之事御座候得ば、人君あまたこれあること広く人

才を挙用きよようせられ候日には、右の前過ぜんかぜんしつ前失を以て

被捨候事には無之候得共、なみなみの人情にては、すれられ

この人にも以前かようケ様ケ様杯不都合を数へあげて、など

善さまたを妨げ候人も多き物に御座候得ば、まづは癖くせ

のなき人を師長はじめに立て人を教へさせ申時は、初

より信仰もつき、おとなしく教訓じゆよういたしを受用致候事

定さだまりたる事にて、此段このだんはおしつけにも不参事まいらずことに

御座候。扱さてまたへいぜいきゆうこうただしき又平生躬行正敷と申内にも生れつもうすうち

き窮屈きゆうくつへんき片気なる人は、人の師には難いたしがたく致候。

ただし、少年のときに不都合な行ないがあっても、成長してから良い先生、良い友だちに助けられて、こころざしと行ないをあらためて、徳行のすぐれた人になる人も数多くいますので、君主が広く才能を登用されるときには、以前のあやまちによって切り捨てることはありませんが、普通の人情では、この人に以前、こうした、ああしたあやまちがあったと言い立てて、その良いところをさまたげる人も多いものですので、まずは癖のない人を先生にして、人を教えさせれば、はじめから信用され、おとなしく教えを受けるものですので、このことは、おしつけるものではありません。さて、ふだん、みずから行ないが正しいといわれても、生まれつき心がせまく、かたよっている人は、人の先生にはできません。

なにゆえ もうしそうらえ 何故と申候得ば、惣て人を取育て申心持は、
とりそだ もうすこころもち
菊好きの菊を作り候様には致間敷儀にて、百
そろうよう いたすまじきぎ
姓の菜大根を作り候様に可致事に御座候。菊好
なだいこん いたすべき
きの菊を作り候は、花形見事に揃ひ候菊斗を咲
ばかり
せ申度、多き枝をもぎとり数多のつぼみをつみ
もうしたく あまた
すて、のびたる勢ひをちぢめ、我好み通りに咲ま
わがこの
じき花は花壇中に一本も立せ不申候。百姓の菜大
もうさず
根を作り候は、一本一株も大切にいたし一畑の中
には上出来も有、へぼも有、大小不揃に候ても、
あり
夫々に大事に育て候て、よきもわるきも食用に立
それぞれ
て申事に御座候。

どうしてかといいますが、すべて、人を育てる心持ちは、
菊好きが菊を作るようにするのではなく、百姓が大根を
つくるようにしなくてはいけません。菊好きの人は、花
のかたちがみごとなものだけを咲かせようと、枝をもぎ
とり、多くのつぼみを捨ててしまい、伸びる勢いをちぢ
めて、自分の好みどおりに咲かない花は、花壇に一本も
ないようにします。百姓の大根作りは、一本、一株も大
切にして、畑の中には、上出来のものがあり、へぼもあ
り、大小が不揃いでも、それぞれを大事に育てて、良い
ものも悪いものも食べものとして役立てるのでございま
す。

こころもち わきま もうすべき
心持を弁へ可申事に御座候。 人才は一樣には
これなき いちがい われこの もちかた
無之ものにて、一概に我此両様の持方の通りにの
もうすべき ぞんじそうろうよう へんき
み仕込み可申と存候様なる片氣にては、
おしえられ たえかね ちぐさいふさい
被教候人も堪兼候ものに御座候。 知愚才不才
それぞれそうおう ひつきよう
夫々相応に取かひ候て、 必竟よき人にさへ相成
あいなり
候得ば、何ぞ御用には立ものと申心得無之、 識度
これなき しきど
きようしよう いたしがたき
狭 少なる人は師長には難 致事に御座候。 先ケ
まずか
よう とこごかんこうなきるべく おおせこうむりそうろう
様の所御勘考可被成候。 蒙 仰 候 種 の 撰 み か
えら
ごらんなされ あまたこれあり
たも被成御覧候書物には数多有之候得ば愚意
ぐい
たいがい もうしのべ
大概を申述候。 以上。

この心持ちをわきまえられることでございます。人の才能は、同じものではありませんので、無理に自分の考えどおりに、才能があるかないかといったことだけで、教
育しようとする片寄った考え方では、教えられるほうも、
堪えられません。知恵のある者、おろかな者、才能のあ
る者、ない者、それぞれにふさわしいように取り扱うこ
とで、結局、善い人にさえなってくれば、何かお役に
立つことだという気持ちがないような、見識のせまい者
を、先生にはできません。まずこのようなところを、よ
く考えられますように。お尋ねのありました種の選び方
につきましても、御覧になっておられる書物に、多く説
かれておりますので、わたくしの考えのあらましを申し
あげました。以上。

○追々得賢慮候付、弥御家中に学問被行おいおいけんりよをえそうろうにつき いよいよごかちゅう おこなわれ

不申候ては不叶儀と思召候得ば、可然儒者御もうさず かなわぬぎ おぼしめしそうらえ しかるべき

雇ひ指南御頼被成度思召候得共、当時学問にしなんおたのみなされたきおほしめしにそうらえども

は種々流義も有之候て、何れか可然御一決これあり いず しかるべきごいつけつを

難被成候得ば、当時行れ申候程朱学、仁斉流、なされがたくそうらえ ていしゆがく じんさいりゆう

徂徠流、三流の内是非を致決定候て、申上そらいりゆう うちぜ ひ けつていたしそうろう もうしあげ

候様にとの御事承知仕候。乍併そうろうよう おんこと つかまつりそうろう しかしながら

愚老式先賢先輩の學術其是非を致裁断ぐろうしきせんけん そのぜひ さいだんいたし

申上候などと申儀は中々難及儀御座候。もうしあげそうろう もうすぎ およびがたきぎに

先以一家の学を興し候程の人は何れ共に一世のまずもつて ほど いず

豪傑にて、各所見有之事に御座候。おのおのみるところこれある

○おいおいすぐれた考えを得たので、いよいよ家中に学

問が行なわれなければならないと考え、しかるべき儒者

を雇って、指導させたいと考えているが、学問にいろい

ろの流儀があつて、どの流儀にすればいいのか決めかね

ており、いまある程朱学（程顥・程頤と朱熹の学説。ていしゆがく ていこう てい い しゆき

宋学）、伊藤仁斎流、荻生徂徠流の三つの流儀のうち、ど

れがいいのか決めて、知らせてくださいとのこと、承知

しました。とはいいまして、わたしのようものが、

おかしの賢人、先輩の学術内容の良し悪しを断定するこ

となど、できません。とにかくにも、一流派の学問を

興すほどの人は、どうみてもその時代の並はずれた人物

で、それぞれみるところのあるものでございます。

但し聖人とても無之候得ば、人々是非得失は勿論ただ
有之うちの事に御座候。長を用ひ短を捨て申候これある
はば、何れ利益の無之学も有之間敷候。然ば其これなき
門流々々にて其師学を推尊致候事、是又尤もんりゆう
なる儀に御座候。乍去何流にても未学未熟のさりながらなりにりゆう
人に候得ば、一概に其書のみを読み、其言のみをそのしよ
信じ、広く是非得失を詳考不致、唯其流義の外ぜひとくしつ
は惣てひがことの様に申唱へ候事、古今同弊にしやうこういたさず
御座候。ただ

ただし、聖人（儒教で、理想的な人とする堯・舜・禹や
殷の湯王、周の文王あるいは孔子などをいう）ではあり
ませんので、それぞれ正しいことと正しくないこと、得
ることと失うことは、もちろんあります。長所を受け入
れ、短所を捨てれば、なんの利益もないといった学問は、
ありません。そうであるならば、その流派、流派によつ
て、その先生と学問を、あがめ尊ぶことは、これまた当
然のことです。しかし、どの流派にしても、学問の修め
方が不十分で、学問や技術などの経験・修練がまだ十分
でない人であれば、すべてその書物のみを読み、その意
見だけを信じて、広く正しいことと正しくないこと、得
ることと失うことを詳しく考えず、ただ自分の流派以外
は、みなまちがっているようにとなえることは、いまも
むかしも同じように悪い影響をあたえます。

譬へば僧家の行法も四宗八宗さまさまに品替り
候得ども、定て得仏性の外は有之間敷候。儒
者の言論も種々に御座候得共、成徳行の外無之様
に被存候。必竟其僧の修行次第、仏性をさへ得
候はば、何れの浄土へか往生は可致候。
儒者も其人の修行次第、美徳をだに成就致候はば、
何れの国家にでも御用には立可申候。左候得ば
先其人の徳不徳を御選み被成候て、流義の処はさ
のみ御撰み無之候ても可然様奉存候。己
の流義を偏屈に申唱へ候て、他流を排棄致候
は全く其儒者一人切の私心にて御座候。

たとえば、僧侶の修行も、四宗（法相・三論・天台・華
嚴の四宗）、八宗（俱舎・成実・律・法相・三論・華嚴・
天台・真言の八宗）では、それぞれちがっておりますが、
みな仏の本性を得ることのほかはありません。儒者の思
想や見解も、いろいろありますが、徳行を成す以外には
ないように思います。つまるところ、その僧の修行しだ
いであって、仏性を得ることさえできれば、どこかの浄
土へ生まれ変わることはできましよう。
儒者も修行しだいで、すぐれた品格さえ成しとげるこ
とができれば、どの国でも役目ができるでしょう。そ
うであるから、まずその人の徳、不徳を選んで、流派に
ついては、それほど考えなくてもよいと思います。自分
の流儀を頑固に言い張って、ほかの流儀を捨て去るよう
なことは、まったくその儒者だけの私心でございます。

人君は万民の主ぬしに御座候。何れにても篤学美行とくがくびこうの賢者を御用ひ被成候なされて、一家国の人心を教化これあり有之、一体の風俗を美敷被成候と申が公道うつくしくなされなる御所作ごしよさに御座候。但し先書追々得賢慮候通せんしよ、偏僻へんべきなる人をば師長しちように御立被成間敷と申義は、おたてなされまじく彼菊好かののきく作り候様には致間敷と申道理いたすまじくにて御座候。もうす

殿様は、すべての人の主ぬしでございます。どこにおいても、熱心に学問に励み、おこないのよい賢い人を、用いて、国家の人々の考えや気持ちを、教え導いて、望ましい方向に進ませ、全体の習わしやしきたりを美しくすることが、正しい道の行ないでございます。

ただし、先の手紙におきまして、順に、あなたさまの賢明な考えを得ましたように、心がひねくれている人を、先生にしてはいけない、ということは、菊好きの人が菊を作るようにしてはいけないという道理でございます。

とかく
兎角人君の花畑には、牡丹、芍薬、菊、桔梗、

紅白黄紫咲交り候て、いつにても生花御入用の

時は、御望次第に赤なり共、黄なりとも、其香

かうばしく花形見事に開き候を、何十本にても花

瓶へ御とらせ可被成事と奉 存候。はなぶり

が悪きとて、枝も荅もむしり捨候て、我好の黄

菊一色と申事は、万民の主の物好には不 宜事

と奉 存候。人の行は善悪唯二通りに御座

候、善人多く生じ悪人の減じ候様にと申より外に、

教化の本意は無之儀と奉存候。

とにかく、殿様の花畑には、牡丹、芍薬、菊、桔梗、紅

色、白色、黄色、紫色の花が咲きまじって、いつでも花

が必要なときには、望みしだいに赤色の花でも、黄色の

花でも、その香りがよく、みごとに開いた花が、何十本

でも花瓶に活けることができるようでないといけません。

花ぶりが悪いからといって、枝もつぼみもむしりとって

捨ててしまつて、自分の好きな黄色の菊だけが咲いてい

るといったようなことでは、すべての人の主としての物

好きにはよくありません。人の行ないは、善と悪のふた

とおりです。善人が多くなるようにして、悪人が少なく

なるようにするしか、教導いて、望ましい方向に進ま

せることの本質はないものと存じあげます。

をかしき咄はなしを承うけたまわり候事有これあり之候。或浄土宗あるの
老師宗徒しゅうとの内うちに内々法華を信じ候由はなはだを承り甚
不決しみじみきようかいに存じ、染々教誡致ことわざし候には、世の諺ことわざに
も法華さよう仏にならずとこそ申せ、左様に法華を信じ
被申候もうされては、中々極樂往生あいならずは不相成事さやうに候と申
聞候処ところそのひと其人申候は左様には御示そうしし候得共、
此間我等親敷浄土宗このあいだわれらしたしきの人致病死候びやうしいたして、三日目
によみがへり申候。冥途みやうとにて地藏尊の御手引ごてりに逢
ひ、地獄極樂をことごとく見て帰り申候処、常々
念比ねんごに致し候法華宗徒の内にも大分往生を致し
居候おりもの有これあり之候由。現在此比このころの事に御座候。

おかしな話を聞きました。ある浄土宗の老師が、信者の
なかに、内々法華経宗を信じている者があることを知っ
て、実に不快に思って、深く心にしみるように、教えさ
としたときに、「世間のことわざにも、法華は仏にならず、
というではないか。だから、なかなか極樂往生すること
はできないぞ」といって、話して聞かせたが、その人は、
「そのように言われましても、せんだって、親しくして
います浄土宗の人が病死しまして、三日目に生き返りま
した。冥土で地藏尊の手引きで、地獄、極樂をすべて見
てきたが、いつも親しくしていた法華宗の人でも、大勢
の人が往生をとげているとのこと。いま現在のこと
でございませう。

しから いちがい 然ば一概に法華仏に不成共難申候半と
なるともむつかしからずともうしそうらわん
申候時、老師大きに氣色を損じ、扱々苦々敷事
さてさてにがにがしき
に候。左様なれば弥陀如来も最早尊とからず候、
たとひ如何成大善業の人にも致せ、我祖師源空
いかなる
上人の一枚起請を背き、他宗を念じ候者を、む
いちまいきしょう そむ
さと極樂往生を為致、膝元へ引寄せられ候事、阿弥
もって ほか
陀如来以外の外の不都合と存候、左候はば愚僧
もはや
など最早最早往生極樂を願ひ候念は無之候と申
みなこれ
候由、大体世上の儒者も皆此浄土宗老師と一般
ぞんぜられ
の見識と被存候。

そうですから、ひとくちに、法華は仏にならないとは言
えませんが」と言った。老師は、たいへん気分を悪くして、
「さてさて、ひじょうに不愉快である。そうであるなら、
阿弥陀如来も、もう尊くはないのであろう。どのよう
に大きな善行をする人でも、わが宗派を開いた源空上人の
一枚起請にそむいて、他宗を信仰する者を、やたらに極
樂往生させて、その膝元に引き寄せられていることは、
阿弥陀如来がとんでもないことをしている。そうである
なら、愚僧などは、もう、もう、往生極樂を願わない」
と言ったという。だいたい、世の中の儒者もみな、この
浄土宗の老師と同じようにふるまうと思われれます。

注 一枚起請文(建曆二年(一一二二年)法然(源空)が死の直前
に自身で遺言を記し、弟子の勢観房源智に授けたものである。経
文には普通、法然上人(又は元祖大師)御遺訓一枚起請文と題され
ている。

古今の諸賢、世話をやき候は何れみな先聖後聖の

教を尊崇致し候為に御座候。たとひ孔子の本意

には違ひ候ても、我流義の祖の遺言には違ひ

申間敷と申事は、何共会得難致儀かと被存候。

申さば今の世に生れ候人は、一統にむかし生れ候

人の弟子にて御座候。

むかしからいまにいたるいろいろな賢人が、世話をやい

ていることは、どれもみな、むかしの聖人（儒教で、理

想的な人とする堯・舜・禹や殷の湯王、周の文王ある

いは孔子などをいう）、後の世に出た聖人の教えを、尊び

あがめるためです。たとえ、孔子、孟子の本意とはちが

っていても、わが流派を開いた人の遺言であるからとい

うのは、なんとも、理解しがたいことです。言えば、今

の世に生まれてきた人は、みな、むかしに生まれた人の

弟子なのです。

愚老如き生質魯鈍なるものも、幸に幼年より書

物を読習ひ秦漢以後の諸書、程子朱子等の遺書も

伺ひ、仁斉徂徠杯の見識をもち候て、其影に

こそ寸志の愚見をも申様には相成候事に御座候。

わたしのような、生まれつき愚かで頭の働きが鈍い者で

も、幸いなことに、幼いときから書物を読みならって、

秦、漢以後のいろいろな書物、程子（中国宋代の兄弟の

儒学者、程顥・程頤の尊称）、朱子（朱熹）などの残され

た書物も見て、伊藤仁斎、荻生徂徠の確かな考えや意見

も借りて、そそうしたもののお蔭で、わずかながら、み

ずからの意見も言うことができるようになったのでござ

います。

然しからは人しれず此この恩徳は広大無量なる儀と存候。

乍しかしながら併なうみの親の教へ置く事なりがたきことにても、成長の上

にて考へ候得ば、一概に左様にも難成事なりがたきこともたま

たま有これある之ものに候。とんぼうかみと月代剃り候さかやきそ

時の差別もなく、親の申置もうしおきたる事とて、是非

其終執行そのままとりおこなひ候て大間違を仕出し候はば、親の心

にては草葉のかけよりも余り悦いたすまじくびは致間敷候。

必竟宗論ひつきようをつのり候僧は、悟道徹底ごどうの師には

有これあるまじく之間敷候。学脈しんじがたきのみを申つぞんぜられのり徳行の沙汰に

及しんじがたきばざる儒者も難信人ぞんぜられと被存候。

ですから、人にはわからないのですが、この恵みは、

非常に大きく無限のものなのです。しかし、生みの親の

教えでも、成長してから考えてみれば、そのとおりには

いかないことも、ときどきあります。とんぼう髪とんぼうのとき

と月代剃りとんぼう（成人してからの髪形）をしてからのときの

区別をせずに、親が言ったことだからと、そのままおこ

なっては、大間違いをすることもあり、親の心としては、

草葉のかけから、あまり喜ばないでしょう。つまるところ、

宗論ふりかざす僧は、仏教の真理をさとしていない

からです。学派だけを申し立て、徳行のおよばない儒者

も、信じることができない人です。

人君の学政を御世話やかれ候主意は、能教よくへて
人民を善に向はせ申事が専務に御座候。程朱学ていしゆがく
を尊び候人は、徳尊き程朱学師に学ばせ、仁齋徠
徠を好き候人はおとなしき仁齋徠学者に教へき
せ、兎とも角かくも人をよくとりかひ候て、善心にな
り候様に可被成儀なざるべきぎにて御座候。何流にても我執がしつ
よく人を得え、教化つかまつらず不仕候はば、無益の学問と
可被思召候。誰とて昨日孔孟より直じかに授り受うけ
候弟子にても無之候得ば、古賢先輩とて是非
得失これなくの無之候ては不叶儀かなわずきと可被思召候。
おほしめさるべく
これなくそうらえ
こけん
おほしめさるべく

殿様が教育について世話をやく本質は、よく教えて人び
とを善におかかわせることが、もつとも大切なことでござ
います。程朱学を尊ぶ人は、徳のある程朱学者について
学ばせ、仁齋・徠徠を好きな人は、おとなしい仁齋・徠
徠学者に教えさせ、とにかく、人をよく取り扱って、善
い心になるようにされることです。どの流派においても、
自分中心の考えにとらわれて、それから離れられない人
を得て、教化ができないのならば、無益な学問だと思
います。誰でも、昨日、孔子、孟子から直接教えを受けた
弟子ではないので、おかしの賢者、先輩であっても、正
しいことと正しくないことや損得を考えなければ、かな
いません。

先書申上候通、大体師長は素志素行正敷、片見せんしよ とおり

片気無之、学問も諸書広く見渡し、古今の治乱かたぎこれなく

興亡、人情変態によく通じ、唯人を親切に導き、ただ

はなたらしの小童迄も何卒善行善心の人になりこわつばまで なにとぞ

立候様にと、実情に取飼ひ候人を先御家中の師たち よう おさだめなさるべく

に御定可被成候。善意善行を見習ひ聞習ひ候て、それ

夫より追々成立候はば其中よりは一廉の大賢英ひとかど

才も出来可申候。然ば先寛々教化に向ひ候様もうすべく しから まずかんかん

にと御世話被成度御事と奉存候。己一人ものおせわなされたき おのれ

しりと心得候て、驕傲不恭なる人を師長にはきようごうふきよう

必御遠慮可有御座候儀と奉存候。以上。かならず あるべく

先の手紙に申しあげましたように、だいたい先生とい
うのは、平素から抱いている志やふだんの行いが正しく、
かたよった見方やかたよった気持ちがなく、学問もいろ
いろな書物を幅広く読んでおり、古今の治乱興亡、人情
の移り変わりをよく知っており、ただただ人を親切に導
き、はなたらしの子どもでも、どうか善行、善心の人に
なるようにと、まごころで取り扱う人を、御家中の先
生とされることです。善意、善行を見習い、聞き習って、
そうしてだんだんと育っていけば、そのなかから、非常
にすぐれた賢者や英才も出てくることでしょう。ですか
ら、まずはゆったりと、教化されるようにお世話をされ
ることです。自分だけが物知りだと思っているような、
おごりたかぶり、無礼な人を先生には、絶対してはいけ
ないと存じあげます。以上。

細井平洲先生の『嚶鳴館遺草』 卷第五

「つらつらぶみ」 臣の巻

君侯くんこういまだ御弱年ごじやくねんの御事おんこと、貴公きこう御忠誠ごちゆうせいを以もつて、
そろそろ御取おとりかひ被成なされ候そうろうて、行々ゆくゆく名譽めいよの君きみと
仰あおぎ候そうろう様被成なされ度たぎとの御事おんこと、乍いま今更さらなりとは
致感心きんしん候いたし。 いたしそうろう

の
いつもいつも得御意ぎよいをえ候そうろう通とおり、一國いつこくの治乱ちらん万民ばんみん
憂喜ゆうきは、只君一人ただきみひとりの徳不徳とくふとくに懸かかり候そうろう事こと
不もう及す申およばず候そうろう。

細井平洲先生の『嚶鳴館遺草』 卷第五

「よくよく考えた御返事」 家臣へあてたもの

お殿様がまだ若いので、あなたが忠実で正直な心で、
ゆっくりとお取り扱いをして、ゆくゆくは名譽のある君
主としてあおがれるようにしたいとのこと、あらためて
そのようなことに感心いたします。

いつもお考えをお聞かせくださっているように、一國
が治まるのか乱れるのか、国民が心配するのか喜ぶのか
については、ただ君主ひとりに、すぐれた品性あるか、
ないかにかかっていることは、言うまでもありません。

かみひとり そうら 上一人だによく候はば千事万行何が悪かるべ

かみひとり よろ せんじまんぎようなに わる

く、上一人の宜しからぬと申時は、千事万行

どうり ここんこれなきぎ これまたもうすにおよばず よかるべき道理は古今無之儀、是又不及申

そうろう 候。

候。

大人は君の心の非を格すと有之候。

たいじん きみ こころ ひ ただ これありそうろう

貴公などの御職分にては何は差置唯君心を

御取かひ被成候事、無上の御忠誠莫大の

大功にて可有之候。

君主ひとりだけがよければ、あらゆること、あらゆる

行ないは、何も悪いことはない。

君主ひとりだけがよくないというときには、あらゆる

こと、あらゆる行ないがよいという道理は、むかしから

いまにいたるまでありません。これまた、言うまでもあ

りません。

「徳の高いりっぱな人は、君主の心のまちがいをなお

す」と言います。

あなたさまのような役目にあつては、なにをさしおい

ても、ただ君主の心を、お取り扱いなされることが、こ

のうえもない忠実で正直な心であり、このうえもない大

きな功績であります。

いまのよかよう ぎ ころざし つく そろろうひと きてきて
今世ケ様の儀に 志を尽し 候人は扱々

めずらしくそろらえ りよがいながらきこう
珍敷候得ば乍慮外貴公などは稀代の忠臣と

ぞんじそろろうこと ござそろろう
存候事に御座候。

さてじんくん とく とかくしんじつしん ごじこ ぜん お
扱人君の徳は兎角真実心に御自己より善を御

この あく おきら なされそろろう ほか これあるまじく
好み、悪を御嫌ひ被成候より外は有之間敷。

そのしんじつしん じこ ぜん この あく もうす
其真実心に自己より善を好み悪をにくむと申

こと ぜ ひ じゃ せい どうり じこ ころ しか わきま
事は是非邪正の道理を自己の心に耽と弁へ

もうさずそろろう あい なら ず ぎ その ぜ ひ じゃ しよう さかい
不申候ては不相成儀、其是非邪正の境を

じこ ころ わきま そろろうみち がくもん そと
自己の心より弁へ候道は、学問より外には

これなき お ころ づ き そろろう こと も は や この う え めい ち めい り よ
無之と御心付候との事、最早此上に明智明慮

これあるまじくぞんじそろろう
は有之間敷存候。

いまの世の中で、このようなことにころざしをつくすような人は、たいへんめずらしいことで、失礼ながらあなたさまなどは、世にもまれな忠義をつくす家臣でございませぬ。

さて、君主の徳というのは、とにかくみずからのまごころからよいことを好み、悪いことをきらうようにされるしかありません。そのまごころから、よいことを好み、悪いことをにくむということは、正しいことと正しくないこととの道理を、みずからがきちんとわきまえていなければなりません。その正しいことと正しくないこととの境を、みずからの心でわきまえる道は、学問しかないと思つておられるとのこと、それ以上のすぐれた知恵、すぐれた考えはありません。

いよいよますますがくもん おすす なされそうろうこと

弥 益 学問を御進め被成 候事、いつ迄も

ゆうもう ぐたいまんこれなきよう ぞんじそうろう

勇猛に御怠慢無之様にと存 候。

ただ ごしんじつ がくもん おすす なされそうろうよう

但し御真実に学問を御好き被成 候様にと

いろいろおこころつくされそうらえども このところご しりよ

色々被尽御心候得共、とかく此所御思慮の

つうじがたくまいりごしんろうそうらなされ おんこと ごもつともしごく

通難 参御心劳 候被成との御事、御尤至極

しやうちいたしそうろう ごしんせつ おもうしこし き りよがいながら

に致承知 候。御深切に御申越の儀、乍慮外

ぐうい おもむきふくぞうなくぎよいをえそうろう

愚意の 趣 無腹蔵得御意 候。

まずもつてきこうおこころざし しごく そうらえ

先以貴公御 志は至極に候得ども、一体の

おとりはから かたいまだおゆきとどきこれなきゆえ ぞんじそうろう

御取計ひ方未御行届無之故かと存 候。

さらに学問をすすめられることを、いつまでも勇気を

もつて何物をも恐れずに行なわれて、おろそかにされな

いようにと思います。

ただし、本心から学問を好きになられるようにと、い

ろいろ尽くしても、とにかくそのところの思いがなか

なか通じずに、心をいためておられているとのこと、も

つともなことと思います。ご親切にも、わたくしにお聞

きくださったことにつきましては、思いもよらぬことで

すが、わたくしの考えを、かくすことなく腹の底から申

しあげます。

まず、あなたさまのこころざしは、もつともなことで

すが、全体としてのお取り計らいが、まだ行き届いてい

ないからではないかと思えます。

まずとく ごしいなさるべくそうろう。いずれ わざにても初心 しよしん

より面白き事は無之候。まして学問と申は がくもん もうす

心術の事に候得ば、御弱年の御方御自心初 しんじゆつ こと そうらえ ごじゃくねん おんかたごじしんはじめ

より面白がり可給わけは無之候。 おもしろ たまうべき これなくそうろう

依之 古より教学の道はまづ良師を求め これによつていにしえ きやうがく みち りやうし もと

良友を選み申事に御座候。 りやうゆう えら もうすこと ござ そうろう

師友、無之候て聖賢の君にひとり成られ しゆう これなくそうろう せいけん きみ な

候人は無之候。 そうろうひと これなくそうろう

扱良師良友とても其君愛敬の二つ無之候 さてりやうしりやうゆう そのきみあいけい これなくそうろう

ては、是又無益の人に候事に御座候。 これまたむえき ひと そうろうこと ござ そうろう

まずじっくりと、お考えください。どのようなことで

も、はじめからおもしろいというものは、ありません。

まして、学問というのは、心の持ち方のことでして、年

若いですが、みずからおもしろがることはありません。

ですから、むかしから教育と学問の道は、まずよい先

生を求めて、良い友人をえらぶことです。

良い先生、良い友人がいなくて、知識・人格にすぐれ

た人物にひとりでなられた人はおりません。

その良い先生、良い友人であっても、その君主に、い

つくしみ合う気持ちと敬う気持ちのふたつがなければ、

何の役にもたたないのでございます。

かる みぶん ひと つねづねしたしくもんどう
軽き身分の人は師匠へは常々親敷問答をも

いた ほうゆう つねづねころやす はなしあい いた そうろう
致し、朋友とは常々心易く咄合も致し候に

つき ころ そうろう ししやう
付、いつとなく心もとけ候て師匠もむつま

きようくん いた ほうゆう きづかいなくぜ ひ あらせ
じく教訓を致し、朋友も無氣遣是非を争ひ

そうろう つき そのなか まな そうらえ ひと われ なにころ
候に付、其中に学び候得ば、人も我も何心

そのふう うつ がくもん あいなりそうろうこと
なく其風に移り、学問おもしろく相成候事に

ごぎそうろう
御座候。

きじん もう しはん めいもく どうと きこ
貴人と申せばたとひ師範などと名目は尊く聞

そうらえども ひつきやうしゆ けらい きみ なん
え候得共、必竟主と家来にて、君には何とな

けいかい ころもち これあり しん もと いけい ころ
く軽侮の心持も有之、臣には元より畏敬の心

これありそうろう こと
有之候て、まづまづ十の事は二つ三つならで

もう ざきそうろう
は申さぬものに御座候。

身分の低い者は、先生といつも親しく問答をして、友
だちとも、いつも心安く話し合いもするうちに、いつと
はなくうちとける。そうして、先生も親密に教えさとし
て、友だちも気をつかわずに、正しいかどうかというこ
とを議論して、そうしたなかで学べば、相手も自分も同
じ心持ちになって、学問することもおもしろくなってく
るのでございます。

身分の高い者は、たとえ師範といつて名目は尊く聞こ
えても、結局は主人と家来であつて、君主があなどる心
持ちもあつて、家来にはもとより恐れ敬う心があるので、
まず十のことはふたつ三つのことしか言わないものでご
ざいます。

まして学問御相手に相成候輩も学問朋立とも難申、唯御伽一通りの心に候得ば、弁へ存じ候事も、先はおしだまり居候て、むさと不申出候。是にて主君の学問と申もの面白く候相成候筋はいつまでも無之筈に候。

左候得ばまづ学問の面白く御成被成候様にと申時は、此処を能く御勘弁可被成事に存候。されば君の学び給ふ臣は師臣と称し又は賓客賓師など申名目も有之候。惣て学問の御稽古計は常礼常格をはずし師は実の師匠、学友は実の学友と申姿に参り候様に可被成事に御座候。

まして、君主の学問相手になった者も、ともに学ぶといつてもなかなかそのようにはならず、ただうわべだけの話になって、知っていることもおしだまって言わずに、うっかりと言いだすこともしない。このようであつては、君主の学問というのもおもしろくはないのは、いつまでたつても同じです。

ですからまず、学問がおもしろくなるようにするには、このところをよくよくお考えになることです。それには、君主が学ぶ家臣を、師臣といい、または、賓客〔大切な客人〕、賓師〔客分として待遇される師〕などという名目もあります。すべて学問の稽古だけは、いつもの礼儀、いつもの格式をはずして、先生は先生として、学友は本当の学友となさるようによろこぶこと、でございます。

君臣心を隔て礼法のみこたわに拘り、はるかまつの末座ざに手をつき頭あたまをたれ、読よみかかりよりよみ仕舞しまいまで定りたる文言を講じ、向むこうへ聞きこえきこへざるの無差別さべつなく、礼法れいほうを失うしなひ申間敷もうすまじきまでにて、一章二章を申済し、其余そのよの事は一言半句も申上ぬ事と申様成姿にては、世よにいふ御書院講釈いんこうしゃくと申物にて、たとひ何年なんねん学び給たまたり共とも、少しの益えきも無な之、誠まことに規式きしき一通りの事ことに御座候。

人を教誨きょうかいすると申心得もうすこころえは、向むこうの年時ねんじ相当そうどう、身分相当みぶんそうどう、性質相当せいしつそうどうを考へ、いづれにも向むこうへ受用うけようのなりやすき様ようにと申儀もうすぎ専要せんようにて、書面しょめんの義理ぎりをたがへず教おしへかたはさまさま有これあること之事ことに御座候。

君主と家臣の心がはなれて、礼儀だけにこたわって、はるか遠くの末席で手をついて頭をたれて、書物を読み始めたときから読み終わるまで、決まった文句を講義して、おここの君主に聞こえようが聞こえまいが、礼儀にそむかないことだけを考えて、一章、二章を話し、そのほかのことは少しも言わないといったようなことでは、世間で言う御書院講釈というものであって、たとえ何年学んでも、少しも得るところがなく、決まりどおりのことになってしまふのでございます。

人を教えさすと心得は、年齢、身分、性質を考えて、相手がわかりやすいようにすることが重要で、書かれてある道理をまちがえずに教える方法は、いくつでもあるのでございます。

元来御聞被成候方も、いまだ胸中に力がらにおききなされそうろうかた

とても無之、学問と申物は唯ケ様にていつまでこれなく がくもん もうすもの ただかよう

も

聞えぬ事を聞て居ることと計御心得被成候得ば、きこと こと きい お ばかりおこころえなされそうらえ

げにげにいつまでも面白くもをかしくも無之事、おもしろ これなきこと

尤至極成事に御座候。もつともしごくなること ござそうろう

但し此姿は大臣重職の人能勘弁有之自身よただ このすがた だいじんじゅうしよく ひとよくかんべんこれありじしん

りまづ其座に伺公して、問答応接を致し見せ参そのざ しこう もんどうおうせつ いた み まい

らせず候ては、末々の輩にては不相成儀にそうろう すえずえ やから あいならずぎ

御座候。

もともと講釈を聞いておられた方でも、まだ心から理

解できる力がなくて、学問とはこのように、いつまでも

聞こえないことを聞いていることかと思われれば、たし

かにいつまでたっても、学問はおもしろくもおかしくも

ないのは、当然のことです。

こうしたなかでは、重職の人が、よく考えて、みずか

ら講釈の場に出て、質問したり受け答えしたりしてみせ

なければ、下々の者ではそういうことはできないのでご

ざいます。

愚老ぐろうが如ごとき愚鈍ぐどんなるものも、たまたま諸家しよけの招まねき

を請うけ候そうろうて、乍ぶちよう無調法師ぼうし匠しょうの真似まねを

致いたし候そうろう処ところ、右みぎ之姿すがたにて何いずれも親したしみ深ふかく申もうし述べ

候そうろうに付つき、いつとなく学問がくもんに深ふかく立入たちいり被申もうされ候そうろう

て、後々のちのちは愚老ぐろうなど及および不申もうさずほどに上達じようたつも

有これあり之したが、随いつかては一家いっかの政事せいじも手厚てあつく、人心じんしん悦服えつぷく

致いたし候そうろう程ほどの方々かたがたも追々おいおい有これあり之そうろう候そうろう。

愚老ぐろうなど外ほかに知慮ちりよも無これなく之そうらえ候得らんば、論ろんより証しようこ拠こ

と申もうす諺ことわざの通りとお、唯々ただただ兼かねていたし覚おぼえ候そうろう所ところ

を得御意ぎよい候そうろう。

扱さて右みぎの親したしみの内うちには、時ときとしては詩作しさくのあ

そび文章ぶんしょうの楽たのしみなども有これあり之そうろう候そうろう。

わたくしのようなおろかな者でも、たまたま諸家の招

きによつて、行き届かないのですが先生のまねごとをし

ておりますが、親しみやすいように話しておりますので、

いつとはなく、学問に深く興味をもたれて、その後は、

わたくしなどが及ばないほど上達されて、国の政治も手

厚くなされ、人びとが心から喜んで従われるほどの方々

も、だんだんと出てきております。

わたくしなど、とくに深く考える能力もありませんが、

「論より証拠〔あれこれ論じるよりも証拠を示すことで

物事は明らかになるといふこと〕」のことわざのとおり、

ただただ前からして覚えたことを申し述べました。

さて、こうした楽しみのうちには、ときとして詩作の

遊び、文章の楽しみなどもあります。

これまたがくもん いちじ そうらえ それ
是又学問の一事に候得ば、夫よりはいつとな
ぎり おもしろ
く義理は面白きものと申に相成 候事自然と
ぞんぜられそうろう してから おもうしこし おもむき
被存 候。 然ば御申越の趣 には、先ケ様
ところ おこころもちいられたくぞんじそうろう
の処に被用御心度存 候。
あしく致し 候得ば学問々々と申名目計に
いた そうらえ がくもんがくもん もうすめいもくばかり
て、いつまでも無面目の素人にて済し被申 候
しゅう すくなからずよう ぞんぜられそうろう
衆も不 少様に被存 候。
ひつきようとり よう いきとどかずゆえ ぞんじそうろう
必竟取かひ様の不行届故と存 候。
ただ これ ぐるう ぶちようほう りようけん ごぎ
但し是は愚老だけの不調法なる了簡に御座
そうらわんや なおまたはくしきこうとく ひと ごそうだんこれありたきこと
候半哉。 猶又博識高德の人へも御相談有之度事
ぞんじそうろう いじよう
に存 候。 以上。

これもまた、学問のひとつですので、それからはいつ
ということはなく、物事の正しい筋道ということもおも
しろく思われるように自然になっただけかれます。です
ら、お申し出のありましたことにつきましては、まずこ
のように心を尽くされるようにと思います。
悪くすると、学問という名目だけで、いつまでも根本
になるものがない素人として済まされてしまう方も、少
なからずおられます。結局、取り扱いが行き届かなか
たからだと思えます。
ただし、これはわたくしだけの不調法な意見かもしれ
ません。さらにひろく知識があり徳の高い人にも御相談
していただければと存じます。以上。

○追々御政事御取扱 候て、篤と御勤考被成
おいおいごせいじおとりあつかいそうろう とく ごかんこうなされ
そうろうところ とかくじようげいちわいたさずそうろう なにごと

候所、兎角上下一和不致候ては何事も
とどきまいらすそうらえ なにとぞいちわいたしそうろうよう

不参届候得ば、何卒一和致候様にと
おころをつくされそうらえども ごしりよ とおり
まいりがたく

被尽御心候得共、御思慮の通には難参
そうろう つきぐろう ごそうだんおよばれそうろう おんこと

候に付愚老へ被及御相談候との御事
しろうちいたしそうろう なるほどじようげいちわいたさずそうろう ぜんせい

致承知候。成程上下一和不致候て善政
じようじゆ そうろうこと こんども あいみえもうさずそうろう

成就いたし候事は古今共に相見不申候。
ほしよう

但し是も極意の所は人君と輔相との徳量にか
かり候事勿論に候。

○政治を執り行なうにあたっては、よく考えているので

すが、とにかく、上下の者が調和していなければ、なに

ごとも行き届かない。だから、調和するように心を尽く

しているのですが、なかなか考えどおりには進まない。

そこで、わたくしに相談したいとのこと、よくわかりま

した。なるほど、上下の者が調和せずに善い政治が行な

われたことは、昔から今にいたるまでありません。

ただしこのことも、本質は君主と君主を輔佐する者の

人徳にあることは、言うまでもありません。

ぶちようほうながらぐまい
乍無調法愚昧だけの了簡つつまず得御意候。
ぎよいをえ

まずもつて
先以人交りは貴賤老少知愚の交共に先施
きせんろうしやうちぐ まじわりとも せんし

もうすみちこれあり
と申道有之候。先施とは先づ施すと申儀にて、
ま ほどこ

こうせつ むこう
交接は向をまたず先我方よりしかけしむけ候事
まず

に御座候。人より親まれたく存候得ば、先ず我
ぞんじ

方より親み、人より敬れたく存候得ば先我方よ
まず

り敬ひ、万事人の我によき様にと存候得は、我

まず
先人によき様に致候事に御座候。

失礼ながら、わたくしの意見をつつみ隠さず申しあげ
ます。

まず人の交わりというものは、身分の高い者と低い者、
老いた者と若い者、かしこい者とおろかな者の交わりに
おいても、「先施」という道理があります。先施とは、先
ず施すということ、人のつきあいにおいては、相手か
らではなく、まず自分のほうから働きかけるということ
です。人と親しくしようと思うのならば、まず自分の方
から親しむようにする。人から敬われたく思うのならば、
まず自分の方から相手を敬うようにする。なにごとも人
から良く思われようとするなら、自分からまず人を良く
思うようにすることです。

貴公きこうなどは重職かくりくともの事、格禄共きやくろくともに御家ごけにて一二の御身分ごしんぶんにて候。左候さそうらえ得ば貴賤きせんと申時は御身分は貴きにて御席ごせきより以下かみは皆賤せんにて御座候。貴きを以もって賤かみに下り、上しもより下しもにくだと申は無上むじやうの徳に致し候事は、天地の道も天氣下り不申候得ば、地氣も上り不申候。天は天、地は地にて陰陽の氣交り不申候得ば、万物生育いたさず不致候。仍これによつて之上下の交り調ひ候は、まづ上かみが初はつに御座候。

あなた様などは、重役で、格式も禄も家臣の中では一番上かその次の身分です。ですから、その身分は貴く、あなた様より下の者は、みな身分が低い者です。こうした貴い立場から身分の低い者の立場に立ち、上より下にくだるということは、このうえもない徳であり、天地の道理も、天の気が下かみにありなければ、地の気もあがりません。天は天、地は地だけで陰陽の気が交わらなければ、すべてのものが育ちません。ですから、上下の交わりと

いうのは、まず上の者から働きかけるのがはじめでございます。

たとへて申候はば賤いやしきものが尊いとき人の前へ出いで
そろうときといと 候時貴ほき方よりまづ是これへと申挨拶無これなく之候得ば、
賤まさき方より先なそれへとては難まかりいでがたく罷出候。此姿このに
て御考なへ可被成候。

親なみも上より下を親なみ候が初すべにて、和なするも上
より下に和なするが初すべにて御座候。惣すべて人情は賤
は貴ちようきに寵ちようせられ、をおろきなきは年たかきに愛たせら
れ、愚おろなるは知慮たある人に悦たばれ度存候は自
然たにて御座候。

たとえていえば、身分の低い者が、身分の高い人の前
に出たときに、身分の高い人のほうから、まず「こちら
へ、どうぞ」と、あいさつがなければ、身分の低い者の
ほうから、「では」と、動きにくいものです。こうしたこ
とを、考えてみてください。

親しむことも、上の者から下の者に親しむことがはじ
まりであって、なごむことも、上の者から下の者になご
むことがはじまりです。どんなことも、人情というのは、
下の者が上の者にかわいがられ、若い者が年長の者に愛
され、おろかな者がかしこい人に喜ばれたいと思うのが
自然でございます。

しかるところ

然 所上は下より親むをまち、老は幼よりな

つくを待候て、上より先施なく老より先施なく候

得ば、下より親むべきたより便なく幼よりなつくべき

便無之候。これなく然時は上下老幼相互しかるときににらみくらべ

を致候様にて寄付れ不申候。いたし寄付心のなきは疎よりつか

遠えんの初め、疎遠なるは不和のもとにて御座候。

惣すべて人嫌を致し候人は人に嫌はれ候人にて御座

候。

それなのに、上の者が下の者から親しんでくることを

待ち、老いた者がおさない者からなついてくることを待

っていたのでは、上の者からの先施の心がなく、老いた

者からおさない者への先施の心がないので、下の者から

親しむ手立てがなく、おさない者からなついていく手立

てがありません。このようなときには、上の者と下の者、

老いた者とおさない者が、おたがいににらみあっている

ようなことで、寄りつくことができませぬ。寄りつく心

がないことから、遠ざかって親しくならず、遠ざかって

親しくならないと、仲が悪くなってしまう。どんな

ことも、人を嫌う人が、人から嫌われるのでございませぬ。

ゆえ いにしえ けんしよりうききき もうしつたえ
故に古より賢相良佐と申伝候人には、

いす
何れもまづ先施の徳厚く、貴を以賤にくんだり、
もって

よくとり
人の心を能取たる人に御座候。さて執政大臣を

とうりよう
棟梁の臣と申候事は、上には上屋ねをいただき
うわや

はしらとしようじ
下には柱戸障子をふまへて、上と下の真中に

立たる役人を申事に御座候。

しかるところ

然所当時の人は家老執権と申役に居り候得
もうす お

ば、そのまま主君と同様なる心持に相成、上へ
あいな

もうすころざし これあり
上へと申志は有之候得共、下へ下へと申志
これなく

まで われひともうしあい
は無之、昨日迄は我人申合たる奉公も、今日よ

ひきはなし
りは格別に引離候て、

ですから、古くからすぐれた大臣でよく君主を補佐す

ると伝えられてきた人は、皆まず先施の徳があつて、貴

いがゆえに下の者の立場になつて、人の心をよくつかみ

とる人です。さて、家老を棟梁〔大工のかしら〕の家臣

というのは、上に屋根があつて、その下の柱や戸、障子

をきちんと立てて、上と下の真ん中にある役人のことを

いふのです。

それなのに、今の人は家老の役にいるといへば、その

まま君主と同じ心持ちになつてしまい、上へ上へという

気持ちはあつても、下へ下へという気持ちはなくて、昨

日までは、お互いに相談して勤めてきたことも、今日か

らは特別に引き離してしまつて、

ものごとねんごろ みずきかす
物事念頃に見不聞候を職を守ると心得候故、

接遇の道日々月々に高上こうじょうに相成候得ば、下々我

と諧和かいわすべき道はふさがり申事に御座候。

貴公杯などは読書も被成候て、右の道理は御弁おわきまへ

候事に候得ば、一体の和を御志候はばまづ下諸役

の人々へ心易く、物事御相談を御しかけ被成度候。なされたく

相談と申時は貴賤上下の差別なく、人々了簡を

申合候て、是非曲直無腹蔵論判もうしあわせいたし候事

に候。

ものごとをていねいに見ないこと、聞かないことを、その職務を守ることと思ってしまうので、人のあしらいも、日ごとに月ごとにあたまごなしに威圧するようになってしまい、下の者と仲良くする手立てもなくなってしまふのでございます。

あなた様などは、読書もしておられ、この道理を知っておられるので、全体の調和をお考えになられるのなら、まず下の諸役人の人びとに気軽にものごとを相談されることです。相談されるときには、身分の差別なく、それぞれの意見を出し合って、正しいことと正しくないこと、まがったこととまっすぐなことを、つつみかくさず議論することです。

当世の姿は下より申もうしたつし達候は皆々五寸一尺の

書付にもものを申させ、家老執政の前へ差出し候て、

低頭平伏致し、安否寒温あんびかんおんの外は一言も申さず、

是非は其指図下知次第そのさしずげちしだいに畏かしこまり候て退しりぞき候を、

官長を敬ふとのみ心得候得ば、官長より裁断さいだん申

渡候わたして、受うけは受候得共、実内心じつに服そろうし候哉否やいな

は、官長にても不存事ぞんぜんに候。

諺ことわざにも一寸の虫にも五分の魂と申候得ば、

人々腹中には是と非これありと有之候事、あながち知者賢

者にもかぎらず候。

いまの世のなかのようすは、下からの意見は文書に書いて、家老の前に差し出して、頭をさげてひれ伏して、無事かどうかとか、暑い寒いといった時候のことしか言わず、その問題をどうすればいいのかについては、ただ指図と命令だけを受けて引き下がってくることを、上司を敬うことだと思っている。だから、上司の指図を受けはするけれども、それを本心から納得したことなのかどうか、上司でもわからない。

ことわざにも、「一寸の虫にも五分のたましい」「小さくて弱いものにもそれ相應の意地があるからあなごりがたしい」と言います。人びとが、正しいことと正しくないこととの思いを持っていることは、知恵のある者やすぐれたものだけにあるものではありません。

しかるゆえ めんじゆうこうげん

然故に面従後言の悪風次第に増長致し、影

おのおのさまさま うつぶん もうしあい

にては各々様々の鬱憤を申合候て、うは向と

よう

は相違し、内心にはうそ笑ひ候様なる悪情を引

しまい

出し候て、終には君の御政事をそぞろ事に致し

なし候様にも相成候事に御座候。

あるこうのくに

まねかれまかりこし

愚老以前或候国へ被招罷越候て、寛々

ゆるゆる

どうりゆういたし

致逗留学政の世話致し候事有之候。其節家老

これあり

そのせつ

大臣一統に申合候て、一月三度宛政事に預り候程

の役方は一席に会合致し、講書など致候て跡にて

よもやま

は四方山の事政事の心得にも可相成咄を致し

あいなるべきはなし

候。

ですから、表面上はしたがつたようにして、あとで文

句を言うといった悪い風潮が、だんだん広がって、隠れてそれぞれいろいろ心のなかに積もり積もった不満を言い合い、表向きとはちがって、内心ではうそ笑いをするような悪い感情を出させて、しまいには、君主の政治をいかげんにするようになってしまう。

わたくしは、前にある国に招かれて、長期間滞在して、その国の教育行政に力を尽くしたことがあります。そのときに、家老と重役が申し合わせて、月に三回政治をあずかる役目の者が一堂に集まり、講義をしたことがあります。その講義のあとで、世間のことを、政治の心得にもなるだろうと思ってお話をしました。

そのせつ めいめいしゅこう 其節は老臣銘々酒肴なども相携候て、酒も

くみ 汲かはし申事に候。但し咄の内には政事の上

遠慮なる筋も有之ものに候得ば、給事杯は壺人

も近付不申、諸士相互に酌を致し候、時々は上

座執政の人もかはるかはる立候て酌をいたし末々

役筋へもたべさせ申、ケ様に一堂の上にて底意

なくおもひおもひの了簡を申談し、是非邪正の

評議を公に致し候に付、いつとなく人心一和い

たし、其節の取扱万事模様よく政事も相立候て、

主君にも甚満足の事に候ひき。

そのときに、老臣がそれぞれ酒とつまみを持ってきて、

みなで酒を飲みかわしました。ただし、話のなかには、

政治上秘密にしておくようなこともありましたので、給

仕などは加えずに、参加者同士おたがいに酌をして飲み

ました。ときどきは、上役の重臣がかわるがわる立って

きて、下役の者に酌をして飲ませました。このように一

堂に集まって心の底から思い思いの意見を話し合い、正

しいことと正しくないことの議論を公表しているので、

いつとはなく人の心がひとつになって、諸事の取り扱い

がよくなって、政治もきちんに行なわれて、君主もたい

へん満足しておられました。

ただいま ぞんじだ
只今など存出し候得ば、さてさてめずらしきたのしき
扱々珍敷楽敷事を

も見聞いたし置候と、おき
老後の思ひ出に御座候。

とにかくによきことも実々に致し候得ば眼前
げにげに

の利益有之候。これあり
如何程よき事_いかほど_かにても規式一通り
きしき

にて実々に無之候ては、げにげに
詮も無之事と被存候。せん これなき ぞんぜられ

貴公杯は国の巨室、など
常々人も尊敬致し候御身分
きよしつ つねづね

に候間、あいだ
真実に御志さへ御立被成候はば上下忠
なされ

節一和の風も起り可申候。もうすべく

いまになって思い出しますと、とてもめずらしいこと
を見たど、老後のよい思い出になっています。

とにかく、良いことも実際に行なえば、眼前の利益を
得ることができます。どれほど良いことであっても、規
則どおりで行なったのでは、甲斐がないではありません
か。あなた様などは、国の重鎮であり、いつも人が尊敬
する御身分ですので、そのこころざしさえ立てられれば、
上下ともに主君への忠義をかたく守ろうとする気持ち
がひとつになることでしょう。

何れにも一和と申事は御政事の行れ申候 最もつとも

第一に御座候。忠思を御廻らし被成度事に御座

候。必竟和合はならぬものと申言葉は、和合

を願はぬ心より申事に候。

人性の善に候得ば、善にむかはぬ人は無之も

のに御座候。初 申述候通人を嫌ひ候が人に

嫌はるる元、人に和せざるは人の和せぬ元に御

座候。先々先施を御心懸可被成候。御深切の御

相談に任せ彼是不顧慮外無調法の有たけを

得御意候。以上。

いずれにしましても、皆がひとつになるということは、

政治を行なうにあたって最も大切なことです。まごころ

をこめてお考えくださいますように。結局、「まじりあう

ことはいけない」ということばは、まじりあってひとつ

になることを願わない心からでていることなのです。

人の性質というのは生まれたときから良いものなので、

良いほうに向かわない人はおりません。はじめにも申し

ましたように、人を嫌うことが、人から嫌われるもとで

す。人と仲よくしないことが、人といっしょにとけ合わ

ないもとです。思いやりのある相談でしたので、心のま

まを申し述べました。どうぞご理解くださいますように。

以上。

○人君は民の父母と申候得ば、御主君にも

先々父母の心持を能御弁へ被成候事、肝要

の儀と御心付候て、切角の精力御尽し学

術に御向ひ被成候様にと、御取かひ被成候

所、兎角時世の俗習にて、主人の学問被致、

道理分明に被相成候ては、下々難勤堪兼

可申儀、只今迄無之候ても相済候儀を、

いらざる御取そだて被成候杯、人々迷惑がり

候得ば、是には御こまり被成候との儀御尤

に存候。

○君主は、領民の父親であり母親であるといひますので、

お殿様においても、まず父親、母親の気持ちをよく知っ

ておくことが、たいせつであるということに気がついて、

力をつくして学問をされるようにと、お取り扱いをされ

てきたが、ややもすると、時代の風潮による世間一般の

ならわしによって、主人が学問をすると、物事の正しい

すじみちをはっきりさせて、下の者が働きにくくなつて

堪えかねるといったことは、これまでは、何事もなく済

んできたことも、余分な取り扱いをすることで、人びと

がめいわくがり、これには困つたとのこと、もっともな

ことだと思ひます。

これいつせい そろうぞくじよう 候 俗情、元より浅はか成 もと あき なる
りようけん もうすこと 了簡より申事に候得ば、無是非事に御座候。 せひなきこと
ただ じんち とく ゆう 但し仁智の徳も勇と申徳無之候ては不行 おこなわざる
こと ごぎ そろうあいだ ゆうもう おんお おせ わなされたき 事に御座候 間、勇猛に御居り御世話被成度 こと
こと ぞんじ 事と存候。 まずよく おかんがえなざるべく そろう 先能御考可被成候。 しんみんか 臣民家國 もと
そろうよう の下に住申候は、てうど人が家の内にすまゐ ひと いえ うち
候様なるものに御座候。

これは、今の時代の全体に広がる世間のありさまであ
つて、もともと思慮のたらない考えから言っていること
であつて、どうしようもないことです。ただし、仁〔思
いやり〕・智〔物事をよく理解する〕といった徳〔すぐれ
た品性〕も、勇〔心が強く、物事に恐れないこと〕の徳
がなくては、実行できませんので、勇気があつて何物を
も恐れないように、お世話することです。まずこのこと
を、よくお考えください。国民がその国に住むというこ
とは、ちようど人が家に住むようなことです。

家いえと申もうせば誰だれも彼かれもよき家いえには住すみよく、あし

き家いえには栖すうく御座候ござい。扱さ其家そのいえはまづ棟むねうつば

りは上道具うえどうぐ、柱はしらかもみ戸障子としようじ唐紙からかみなどは中道なかどう

具ぐ、縁敷居えんしきねだつく土台廻りどだいまわは下道具したどうぐに御座候ござい。

然しか処る如何計上中下の道具材木しかりうえなかしよろしく候ございても、

上屋根うわやねと申物無之候もうすものこれなくては一日も雨露しゆの凌しのぎは成なり

不申もうさず、仍これによつてうえなかし之上中下の材木なはたとひ、ひばひの

きけやき杯などの上材じようざいにても、上やねうわが雨漏あまもりいたし

候得そうらえば、三材さんざいともに朽腐くちくさり申候もうし。少々柱しょうしょう

はゆがみ戸障子じようぶは破れ損そのいえじ候すみおても、上やねうわさへ

丈夫じようぶに候得そうらえば、人は其家そのいえに住居申候すみお。

家といえは、だれもが良い家であれば住みやすく、悪

い家では住みにくいものです。それで、その家というの

は、まず棟木むなぎと梁はりが上の道具、柱かもし、鴨居かもい、戸、障子、唐

紙などが中ほどの道具、縁、敷居、床板、土台が下の道

具です。そうしたなかで、どれほど上中下の道具、材木

が良くても、屋根がなければ一日でも雨露をしのぐこと

ができません。ですから、上中下の材木が、ひば、ひの

き、けやきといった上等なものであっても、屋根が雨漏

りすれば、どの材料もくさってしまいます。少しばかり、

柱がゆがんで、戸障子が破れていても、屋根さえじよう

ぶであれば、人はその家に住みます。

しかるゆえ うわやね なる じようぶ いたしたく
然故に上屋根は成たけ丈夫に致度かやぶき

よりはよしぶき、よしぶきよりはこけらぶき、こ

けらぶきよりは瓦ぶき、其瓦も銅瓦に候得

ばいつまでも破れもり候 心遣ひは無之候。

主君は此上屋ねにて御座候。家老用人諸役人諸

頭平士は上中下の諸道具にて御座候。如何計

上中下の道具よき材木に候ても、上屋根が破れ屋

根に候得ば、家を可持様無之候。左候得ば上屋

根の丈夫に相成候を嫌ひ申候事、先以余り

なる無分別に御座候。

ですから、屋根はできるだけじようぶにして、かや〔す

すきなど・植物〕ぶきよりは、よし〔あし・植物〕ぶき

に、よしぶきよりはこけら〔木材の薄板〕ぶきに、こけ

らぶきよりは瓦ぶきに、その瓦も銅瓦〔木製の屋根瓦に

薄く延ばした銅板を張り付けたもの〕であれば、いつま

でもやぶれる心配がありません。お殿様は、この家の屋

根です。家老、用人、諸役人、諸頭、平士は、上中下の

諸道具です。どれほど上中下の道具が良い材木であつて

も、屋根がやぶれ屋根であれば、家をもつことはできま

せん。ですから、屋根がじようぶになることを、嫌われ

ることは、あまりにも思慮がなく軽率なことをございま

す。

国の大小臣だいしやうのしんのおの我われこそ棟むねよ梁はりよ、我われこそ

床柱とこばしらよ、きき柱などよぞんじおり 杯うちいかめしく存居候内うちに、

屋根そうらがぼろぼろ破れ損じ候いかにはば、如何可致哉いたすべきや。

雨露くちに朽ほかくさり候これあるまじくより外ほかは有之間敷候。

家国かこくも上かみ壺人いちにんの徳明とくあきらかに仁義じんぎの道正敷みちただしく

被執行候とりおこなわれはば、下臣しもしん民一統みんいつとうに安泰あんたいなる事眼前ことがんぜん

の理りに御座候しか。然るをなりあかると成候なりを嫌きらひ候心こころ

は、うしろくこれあるゆえらき心有之故こころあるゆえに御座候こころあるゆえ。貴公きこう唯今ただいま

御主君ごしゆくんを明君めいくんに可被成なされるべくとの御志おこころざしは、彼上かのうわやね

を丈夫じやうぶに被成なされ、下したに住候すみそうろうひとびとあんたい人々安泰あんたいにとの御おん

事ことに候そうろう。

国のすべての家臣が、それぞれ、おれこそ棟だ、梁だ、おれこそ床柱だ、きき柱などと、いかめしくしていて、いるうちに、屋根がやぶれてしまったら、どのようにするつもりですか。それらも雨露でくさっていくしかないではありませんか。

国家も、お殿様の徳が明らかになって、仁義（人として守るべき道徳）の道が正しく行なわれれば、国民すべてが、無事でやすらかになることは、たしかです。なのに、賢明になられることをきらうのは、うしろめたい心があるからです。あなたさまが、いまお殿様を賢明なかにされようとするこころざしは、家の屋根をじょうぶにして、その下に住む国民が、無事でやすらかに暮らせるようにされることです。

もはやにひやくねんありがた
最早弐百年有難き安楽世界に住み申事は、
もうすこと

天下の御上屋ねが御丈夫なる御影にて御座候。
おんうわや ごじようぶ おかげ

今国の上屋ねを御修復被成候を厭ひ嫌ひ候
いまくに うわや なされそうろう いと きら そうろう

人情も、必竟太平安楽の世に生れ、先祖々々
にんじよう ひつきようたいへいあんらく

の辛勞苦行して立置候家の内に何心なく明
しんろうくぎよう たておきそうろういえ うち なに あか

しくらし候て、風雨露霜の難儀を身に不受人々
ふううろそろう なんぎ うけぬ

に御座候。

此人情に御こまり候て学問と申ものを為致、
この そうらえ すぐ いたさせ

家が倒れ候得ば直に風雨の難を受候道理を弁
そうらえ すぐ なん うけ どうり わきま

へさせ、人も我も供勢に此家を持つづさぬ様に
われ ともせい このいえ もち しよう

と申御世話に御座候。
もうすおせわ

もうすでに二百年も、ありがたい平和な時代に住んで

いることは、天下の屋根がじょうぶなおかげです。いま

屋根を修理することを嫌う気持ちも、結局、太平安楽の

世に生まれて、先祖がづらい苦勞をして建てておかれた

家で何の苦勞もせずに暮らして、風雨をしのぐ難儀をせ

ずにきたからなのでございます。

こうした人情にはこまるので、学問というものをさせ

て、家が倒れたなら、すぐに風雨をしのぐことができな

くなることを教え、みんないっしょに家が倒れないよう

にお世話することです。ございます。

扱さて又またむなぎうつぱり弱せうらえく候得なほどば、何程うわよき上
屋やねもたるみ、棟梁むねはりつよく候せうろうても、柱はしら々はしらが弱
く候得またば又またゆがみ、柱じようぶ々ぶが丈夫じようぶに候どても土台ど廻だいまわ
りが朽くち候得くちば又またかたぎ、土台ぢかた丈夫ぢかたに候ぢかたても地形
がしまり不もうさず申候得しまいば終しにはくつがへり申候もうし。
百ひやくしやう姓ぢかたは国ぢかたの地形ぢかたにて御座候これによつていしえ。仍なほ之これ古こより
地形ぢかたの百ぢかた姓あずかを子ごの如あわれく憐たまみ給じんくんふを仁君しやうと称しし、
その地形ぢかたを預ただしくりて正敷取扱だいかんふ代官りやうりを良吏りやうりと称し
し、柱戸障子ちゆうしんの如ちゆうしんく所々ちゆうしんに立ちゆうしんならびて、自分むねはり々々
の役儀やくぎを大切たいせつに勤つとめる人ちゆうしんを忠臣ちゆうしんと称むねはりし、棟梁むねはりの
如ごとく上うえをうけもち下したのゆるがぬ様ように重おもしになる
人けんしやうを、賢相けんしやう大臣ちゆうしんと称もうすことし申事せうろうに候せうろう。

それからまた、棟木、梁が弱いと、どんなにじようぶ
な屋根でもたるんでしまい、棟木、梁が強くて、ほか
の柱が弱ければゆがんでしまい、柱が強くて土台回り
がくちてしまえばまたかたぎ、土台がじようぶでも土地
がしまっていないければ、しまいには倒れてしまいます。
百姓は土地です。ですから、おかしから土地の百姓を、
自分の子どものようにいとしく思うお殿様を、仁君（い
つくしみ深い君主）とたたえ、その土地をあずかって正
しく取り扱う代官を、良い役人とたたえ、柱・戸・障子
のようにところどころに立ち並んで、それぞれの職務を
大切に勤める人を、忠臣（忠義を尽くす家来）とたたえ、
棟や梁のように上部を受け持って下がゆるがないように
重しになる人を賢相（賢明な大臣）とたたえたのです。

扱君は上屋根の破れ損じて、下に立物のぬれ

くさらぬやうにと、心を被用候事に御座候。

惣て人は異見教訓を能聞受候得ば、たとひ過失

有之候ても、救ひとどめ候事も相成候に付、昔

より人君は諫諍の臣を宝に被致候事に御座候。

然共諫諍の臣を被用候ば、元来自身の徳明ら

かなる故に候。一向道理にくらく横紙を破り

候人には、致方も無之候。さればこそ昔より

諫諍の臣は有ながら、其教に不従家国を滅

し候君も数かぎりなく候。

さてお殿様は、屋根がこわれて、その下の物が濡れて

くさらぬやうにと、心を尽くすことです。人はみな、

他の人とは違った考えや教訓をよく聞くので、たとえば

やまちをおかしても、救うことができずので、むかし

から君主は、いさめ言い争う家臣を宝にされたのです。

そうした、いさめる家臣を大切にされるのは、もともと

君主自身の徳が明らかだからです。まったく道理がわか

らず、無理を押しとおすような君主では、どうしようも

ありません。ですから、むかしからせつかくいさめてく

れる家臣がいながら、その教えに従わないで、国家を滅

ぼしてしまった君主も多くいます。

殷いんの末すえにも箕子きし、微子びし、王子比干おうじひかん、膠鬲こうかくなど

申もうし候そうろうけんち賢知だいじんそろの大臣お揃そうらえどもひ居ちゆうおうり候そうらえども得共ちゆうおう、紂王ちゆうおう

不被用もちいられず候そうろうとき時は致方いたしかたもなく、みすみす殷いんの世

は亡もうしび申もうし候もうし。

今人いまじん君高貴くんこうきの身分みぶん、自心じしんより是非ぜひ邪正じやせいのかみわ

け無これなく之もうすときと申しも時は、下しもなるものは齒はをかみ手をてに

ぎりながら、その無む分別ぶんべつに随したがひ、破やぶれ屋根やねの下した

にてともども朽腐くちくさり候そうろうより外ほかは無これなく之そうろう候そうろう。

殷いん〔中国古代の王朝〕の末期にも、微子びし〔微子啓は、

中国の殷の王族〕、王子比干ひかん〔中国殷代の王子。帝辛（紂

王）の叔父に当たる〕、膠鬲こうかく〔殷の上大夫〕といったす

ぐれた大臣がそろっていたけれども、紂王ちゆうおうから用もちいられ

なくなつたときには、どうしようもなくなり、わかつて

いながら殷は滅びてしまつたのです。

君主は尊く身分の高いかたで、みずから正しいことと

正しくないことがわからないようでは、下々の者は、齒

をかみしめ手を握つてがまんをして、その思慮がなく軽

率なことにしたがって、こわれた屋根の下で、ともにく

ちはてていくしかないのです。

然故に自己心より恐れ慎み給はり候様にと
申所より、其道理の分る学問を御すすめの事
に御座候。然ば人君の明智になられ候は、
尽く下たるものの心身安楽なる根元に有之候。
是を迷惑に存候人は何共可申様なき至愚の人
に御座候得ば、さやうなる人々には御頓着
被成まじく候。惣じて善政を存立候時は、賢
智の人の服し候様にと申を目当に可致事、
至愚の人は此方より夫々に取扱ひ遺し可申事
にて、其了簡を用ひ可申筈には無之候。善を
挙げ不能を教へ候事、上たる人の心得に御座
候。

ですから、お殿様みずからが恐れ慎まれるところか
ら、その道理のわかる学問を、おすすめになることです。
そして、君主としてすぐれた智恵をもたれることが、す
べて下々の者にとって、身も心もやすらぐ根本になるの
です。それを迷惑だと思ふ人は、どうしようもないおろ
かな人であつて、そのような人びとは、気にかけないこ
とです。なにごともしよい政治を行なうときには、賢くて
智恵のある人がしたがうようにすることを目的とすべき
です。おろかな人には、こちらから手をさしのべて取り
扱ふことであつて、その考えを聞くことはありません。
良いことをかけ、良くないことを教えるのが、上に立
つ者の心得でございます。

さればまづ主君しゆくんを明智めいちに致し、明智めいちの風高根かぜたかね

より吹おろし、下々しもじもぐまい愚味そうもくの草木そのかせは其風そのかせになびき

随したがふやうに被成なされ候得ば、いつの間にか共々ともどもに

君きみの明智ありがたを悦び有難あいながるやうに相成あいなものに御座

候。愚老弱年ぐろうじやくねんにて長崎ゆうがくに遊学せついたし候節、笑しょう

止しなる儀目前ぎもくぜんに有これあり之候。

或町人ある一家内殊ことの外河豚汁ほかふぐじるを好きもうしたべ申候。

然処しかるところに隣家りんかへよき医者家移りを致し、右町家みぎまちや

の亭主ねんごと念比あいなりに相成かの、彼かふぐ汁みぎを好きみ申候儀見

候て、常々つねづね意見を致し候に付、

ですからまず、お殿様をすぐれた知恵をもったかたに

して、そのすぐれた知恵を高いところから吹き下ろして、

しもじものおろかな草木を、その風になびきしたがわせ

るようにされれば、いつのまにか、みなお殿様の知恵を

喜びありがたがるようになります。わたくしは、若いと

き長崎に遊学しましたが、そのときに、ばかばかしいこ

とを目にしました。

ある町人一家が、とてもふぐ汁が好きでした。そうし

たところ、となりに良い医者が引越してきて、その町

屋の亭主と親しくなり、ふぐ汁が好きなのを見て、たび

たび「あたることがあるから食べないように」と、注意

をしました。

亭主も尤もつともに存じ一家内ふぐ汁を法度に申付候はつと もうしつけ
所妻子召使めしつかひ共ども甚はなはだ憤り候て、詮せんなき医者が隣となり
へ参り、主人のふぐ汁をやめさせ候とて彼是とかれこれ
申合まじ、色々讒訴を致し、終しまいに右医者と亭主と
を中たがひなか為致候。夫より又々ふぐ汁をたべ候いたさせ またまた
事に相成候。或時又々例のふぐを買求め候て、あいなり あるとき れい
一家内打寄存分うちよせぞんぶんにたべ候処、果して毒にあたり、ところ はた どく
亭主妻子召使共ども七八人皆々倒れ伏申候。翌朝に
なり昼までも門戸を不開候付、近隣よりあやもんこ ひらかずそうろうにつき きんりん
しみ気を付見候処、膳つけみ椀も其終ぜんわんにて行燈そのまの前にあんどん
よりこぞり倒れ居おり、

それで、亭主は、もつともだと思い、ふぐ汁をたべるこ
とを禁止しました。ところが、妻子や召使の者どもが、
とてもおこつて、しかたのない医者がとなり越してき
て、主人にふぐ汁をやめさせた、いろいろ悪口を言っ
て、しまいにその医者と亭主とを仲たがいさせた。それ
からまた、ふぐ汁をたべるようになった。あるとき、ま
たふぐを買ってきて、一家全員でたべたところ、思っ
いたとおりふぐの毒にあたって、亭主、妻子、召使ども
七、八人がみなたおれてしまった。翌日になって、昼に
なつても戸があかないので、近所の人が心配して見に行
つたところ、お膳も椀もそのまま、行燈の前で寄り添
つたおれていた。

まつた 全^まくかの河豚^{ふぐ}の毒^{どく}にあたり候^{そうろうてい}体^{あいみえ}に相見^{あひみ}候^え、
そのうち^{そのうち}こ 其内^{かまど}に小^こでつち一人^{ひとり}竈^{かまど}の前^{まへ}に伏^{おり}し居^{これ}、是^いのみ息^{いき}
かよひ候^{つき}に付^{つき}、ふぐの毒^{どく}を解^とし候^とには人^{じん}糞^{ぶん}が妙^{みょう}
薬^{やく}と申^{まを}候^らて、糞^{くそ}を用^{もち}ひ候^{そうらえ}得^えば、暫^{しばらく}過^{すぎ}候^こて、是^{これ}
は仕^し合^あへによみ^{あわせ}がへり申^{もうし}候^{そうろう}。其^{その}者^{もの}申^{もうし}聞^き候^かは、
今日^{けふ}は家内^{うちよせ}打^{うち}寄^よふぐ汁^{じゆ}をたべ申^{もうし}候^こ。私^{わたくし}はかねが
ね隣^{となり}の御^ご医^い者^{しや}の被^{もう}申^し候^こを尤^{もつとも}に存^{ぞん}じ、たべ不^{もう}申^し候^こ
所^{ところ}、今日^{けふ}は主人^{しゆじん}夫婦^{ふうふ}大^{おほ}きにい^いかり、主^{ぬし}さへたべ
候^{こう}物^{ぶつ}をおのれ一人^{ひとり}たべ不^{もう}申^し候^ことて叱^{しか}られ候^こに付^{つき}
無^む是非^{ぜひ}少^{せう}々^く、たべのこりはそと隠^{かく}して捨^{すて}申^{まを}候^らと
申^{もう}聞^き候^こ由^{よし}。

まったくふぐの毒にあたったようであった。そのなかに、
年若いでつちがひとりかまどの前でたおれており、この
子だけが息をしていたので、ふぐの毒を取り除くには、
人糞がよく効くというから、糞を飲ませたら、しばらく
して幸いにも生き返った。で、そのでつちが言うのには、
「きょうは、家内みなでふぐ汁をたべました。わたし
は以前からとなりのお医者さんが言うことを、もつとも
なことだと思っていまして、たべなかつたところ、
きょうは主人夫婦がたいへんおこって、『主人がたべる
ものを、どうしてお前はたべないのか』としかられたの
で、しょうがなく少したべて、あとは捨てました」と。

おうめいかんいそう
嬰鳴館遺草巻第五

ふぐ汁をとめ申候もうしそろう 医者は身の安全を教へ候そろう
人に御座候ござそろう。然共しかれどもふぐ好き共どもは却て身の安
全を悪にくみ嫌きらひ申候。扱さてふぐ好きどもが身の安全
を嫌きらひ候とて、我われも養生をやめ毒をたべ候は、此この
小こでつちにはおとり候人にて御座候。でつちも心
ありて毒を少々給候故たまひゆえ、糞くそは給候得共ども、命は
助り候。とてもものに全く不給候たまわすはば糞くそもたべ
まじく候。すべて俗情はをかしき事多きものに御
座候。以上。

ふぐ汁をたべることを止めた医者は、からだの安全を
教えた人です。でも、ふぐ好きな者どもは、かえってか
らだの安全のことを考えなかった。それで、ふぐ好きの
者どもが、安全のことを考えずにふぐをたべたことは、
このでつちよりもおとったことです。でつちもやむをえ
ず少したべてしまったので、糞をたべさせられることに
なってしまったが、命は助かった。いっそのこと、まっ
たくたべなかつたら、糞もたべずにすんだのに。どんな
ことも、ものを欲しがることは、おかしいことが多いも
のです。以上。